

中国第二中幹線ルート送電鉄塔
建設予定地内遺跡調査報告書

須坂遺跡・他

1997年3月

島根県

仁多町教育委員会

須坂古墳群航空写真



序 文

本書は、中国第二中幹線鉄塔建設事業に伴い実施した埋蔵文化財調査記録であります。

このたびの調査は、鉄塔建設予定地内の遺跡有無の確認、分布状況、試掘調査、発掘調査を平成7・8年度2ヶ年にわたって実施したものです。ここにその古墳群3ヶ所・鉄穴遺構2ヶ所・横穴墓1基の成果を報告書として収録しました。

遺跡の特徴としては、調査したすべての古墳がそれぞれ6基・4基・15基の古墳群から構成され、特に、須坂古墳群は前方後方墳や奥出雲地方で初見の直径30mの墳丘が確認されるなど、古代史研究における本町域の歴史的価値の高さや、往時の隆盛が想像できます。

また、鉄穴跡では開発などによりその地形が消滅しつつあるなかで、水路トンネル跡等の調査ができたことは大きな成果がありました。

今回の調査において幾多の遺跡が発見されたことは、当地方において未だ確認されていない遺跡が多く存在するものと思われ、今後は計画的にそれらの分布調査を行う必要があると考えます。

終わりに、本調査にあたり中国電力(株)島根支店をはじめ、各方面、関係各位の御理解・御協力を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

仁多町教育委員会

教育長 石 飛 弘

例　　言

1. 本書は仁多町教育委員会が中国電力(株)から委託を受けて、平成7年度及び8年度に実施した中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地点（仁多町内）の遺跡調査の報告書である。

2. 調査体制は次のようである。

調査主体 仁多町教育委員会 教育長 磯田兄訓（前任） 石飛 弘（後任）

調査事務局 川西孝行（教育次長） 植田一教（社会教育係長） 平田昭憲（社会教育主事補）

調査者 平成7年度（分布調査及び詳細分布調査） 蓮岡法暉

平成8年度（試掘及び発掘調査） 杉原清一 藤原友子

調査指導 島根県教育庁文化財課

渡辺貞幸（島根大学）

調査作業 青戸延夫 藤原由市 安立一男 新田憲道

3. 本書に収録した遺跡は次のとおりである。

須坂遺跡 …… 4号古墳及び1号横穴墓の調査

下沢田遺跡 …… 鉄穴遺構の現況

下沢田北山遺跡 …… タ

正覚古墳群 …… 古墳群の現況

家の上古墳群 …… タ

4. 考古地磁気年代測定及び出土人骨の測定・鑑定は次のように依頼して行い、その成果報告は付編として収録した。

4号墳焚火跡の考古地磁気年代の測定 時枝克安（島根大学総合理工学部）

1号横穴墓出土人骨の鑑定 井上晃孝（鳥取大学医学部）

5. 揃図のうち第1図・3図と9図のうち一部は仁多町所管の地図を用いた。その他の図の方位は調査時の磁北を示す。

6. 本書の執筆はそれぞれ担当した調査者が行い、目次に姓を記した。編集は蓮岡・杉原が協議し、杉原・藤原が行った。

7. 須坂遺跡は当初須坂古墳群として調査を進めたが、異なる遺構が複合していることが判り、中途から呼称を変更したものである。

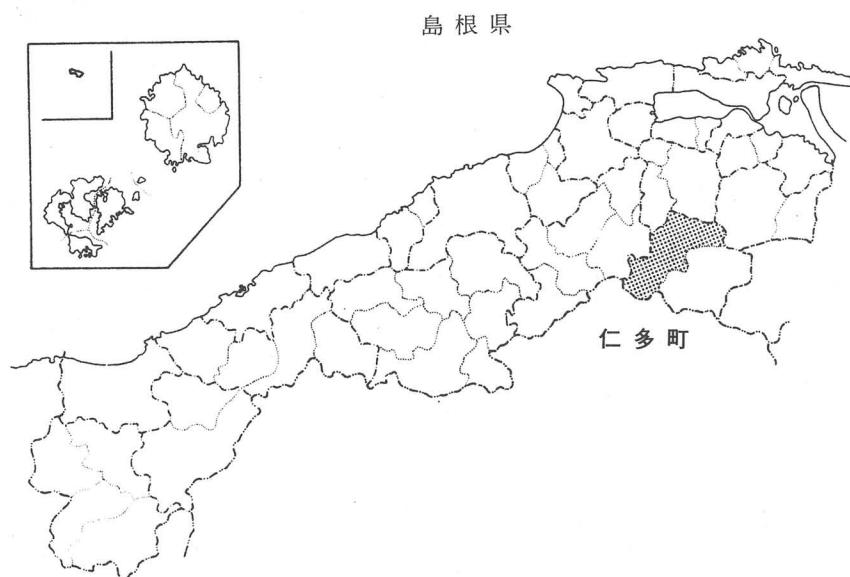
8. この調査にあたり勝部 昭氏及び中国電力(株)松江支店の指導・協力を得た。記して謝意を表す。

目 次

扉写真 一須坂古墳群航空写真一	中国電力(株)提供			
序	仁多町教育委員会 教育長 石飛 弘			
I 調査の経緯と経過	(植田) 1			
II 仁多町の地理的・歴史的環境について	(蓮岡) 2			
III 鉄塔建設地点の詳細遺跡分布調査について	(〃) 4			
鉄塔番号 275	鉄塔番号 276	鉄塔番号 283	鉄塔番号 284	
鉄塔番号 291	鉄塔番号 295	鉄塔番号 299	鉄塔番号 301	
IV 遺跡各論	9			
1. 下沢田遺跡	(蓮岡) 9			
2. 下沢田北山遺跡	(〃) 11			
3. 家の上古墳群	(〃) 13			
4. 正覚古墳群	(〃) 15			
5. 須坂古墳群	(杉原) 17			
V 須坂遺跡の調査	(〃) 21			
A. 須坂4号墳の調査	22			
立地と地形	墳丘の築造について	埋葬主体等の探索	4号墳丘含有の遺物	
埋没建物跡	溝状遺構	小削平段について	各遺構の前後関係	遺物について
B. 須坂横穴墓の調査	38			
横穴墓の位置と発見状況	遺構	玄室の状況	土器の供献	羨門部付近について
被葬者について	時代観など			
C. むすび	42			
IV 結語	(蓮岡) 44			
付編I 須坂遺跡の焼土面の残留磁気測定結果				
島根大学総合理工学部 時枝克安 成 亨美 渡部道貴	45			
付編II 須坂遺跡第1号横穴墓出土人骨 鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝	47			

挿 図 目 次

- | | | | |
|---------------------------|-------|-----------------|-------|
| 図 1. 幹線ルート周辺遺跡分布図 | 3 | 図11. 4号墳丘実測図 | 23・24 |
| 2. 鉄塔番号283付近試掘調査図 | 5 | 12. 建物跡 I | 27 |
| 3. 須坂古墳群分布図・ | | 13. 建物跡 II と溝遺構 | 29 |
| 4号墳調査溝土層図 | 6 | 14. 削平段遺構 | 30 |
| 4. 鉄塔番号299・301調査溝土層図 | 7 | 15. 裸形土器 (1) | 33 |
| 5. 下沢田遺跡平面図及び
鉄穴水路断面図 | 10 | 16. タ (2) | 34 |
| 6. 下沢田北山遺跡平面図・
鉄穴水路断面図 | 12 | 17. 器台 | 35 |
| 7. 家の上古墳群平面図 | 14 | 18. その他の土器 | 36 |
| 8. 正覚古墳群平面図 | 16 | 19. 石礫器類 | 37 |
| 9. 須坂古墳群実測図 | 19・20 | 20. 須坂1号横穴墓実測図 | 39 |
| 10. 調査前地形図 | 21 | 21. 玄室図 | 40 |
| | | 22. 供献土器 | 41 |



I 調査に至る経緯と経過

平成6年10月から実施された県教委の中国第二中幹線鉄塔建設予定地埋蔵文化財調査において町内で遺跡の可能性8箇所が報告された。町教委では平成7年5月にこの地点についての分布調査を行い、5箇所について確かな遺跡の存在を確認した。こうした経緯から事業主体の中国電力において建設予定地の変更が検討され、町教委では同年9月から翌年6月にわたって変更予定地を含めた7箇所（1箇所は工事立会）とその作業範囲について測量及び試掘調査を行い、再度遺跡の範囲等の詳細調査を実施した。

確認された遺跡中、家の上古墳群と正覚古墳群については建設地点が変更されたことにより現状保存となった。また、下沢田遺跡と下沢田北山遺跡については、広範囲に及ぶ鉄穴跡であり、最大限の保存を要請し施工範囲については記録保存にとどめざるを得ず、須坂古墳群については変更後の建設予定地内にも古墳が存在することから発掘調査をすることとした。残り3箇所については試掘及び立会の結果、遺跡の存在は認められなかった。

平成8年6月10日から須坂古墳群全体の地形測量並びに鉄塔脚予定地の2号墳墳裾部及び4号墳、周辺作業区域について発掘調査を開始した。調査の進展とともに住居跡等も発見され、新聞等で大きく報じられたところである。7月24日、町内外から100名の参加を得て現地説明会を開催し、7月30日をもって外業調査を終了した。遺跡の取り扱いについては県教委と協議のうえ記録保存とし、建物跡Ⅱについては埋め戻しして保存することとした。

同年12月2日、須坂4号墳下方斜面で鉄塔脚掘削中に地下深くから横穴墓が発見され、翌3月から緊急調査を行った。現状保存は不可能であり県教委と協議のうえ記録保存とした。

このたびの調査において大量の遺跡が発見されたこともあり、当初の概報のみの予定を変更し一冊の報告書として発刊することとした。以下、経過を列記する。

- | | | | |
|----------|-------------------------------------|-------|-------------------|
| H6.10. | 町内鉄塔建設予定地（52基）について埋蔵文化財分布調査を実施（県教委） | | |
| H7. 5.18 | 遺跡可能性地点の分布調査を開始（8箇所）、以後町教委において調査実施 | | |
| H7. 9.～ | 詳細分布調査を実施（4箇所）、H8.5.10～詳細分布調査（3箇所） | | |
| H8. 6.10 | 須坂古墳群4号墳の発掘調査開始 | 7.16 | 調査指導（県教委） |
| H8. 7.23 | 調査指導（島大渡辺貞幸教授） | 7.24 | 現地説明会を開催 |
| H8. 7.26 | 島大物理学研究室による考古地磁気年代測定 | 7.30 | 現地調査終了 |
| H8. 7.31 | 遺跡の取り扱い及び鉄塔建設設計画について中国電力と協議（以後隨時） | | |
| H8.12. 3 | 横穴墓の発掘調査を開始 | 12.24 | 鳥大法医学教室に出土人骨の鑑定依頼 |

Ⅱ 仁多町の地理的歴史的環境について

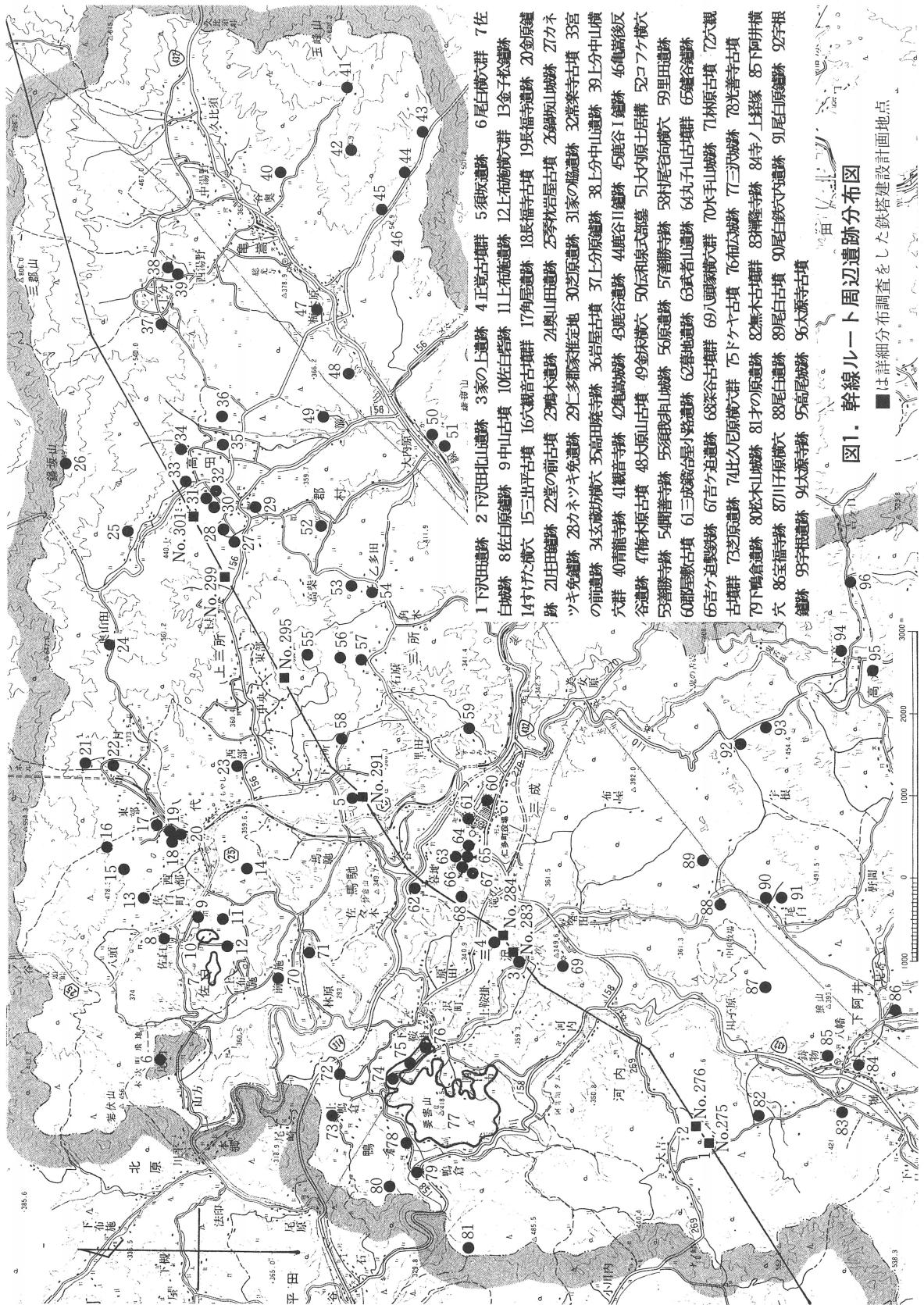
仁多町は、出雲の南部（雲南地方）でいわる奥出雲にあたり、中国山地の脊梁地帯に位置する。当地方は、地理的に古来山陽方面との交通路が開けており、上阿井から玉貫峠を越えて（国道432号線の道筋）、あるいは横田町小馬木を経由し俵原越をして広島県比婆郡高野町へ通じるルートがあり、また横田町大馬木を経由して、あるいは八川三野原を経由して（奥出雲おろちルートの道筋）比婆郡西条町油木と通じる道があった。なお横田町大呂を経由して鳥取県日野郡日南町阿毘縁と往来することもできた。このような山陽とは地理的にも近く通行が容易であったため古くから交流があり、古代以前においても山陽側の影響をみることができる。

またこの地方は良質の真砂砂鉄の産地で、特に中、近世には「たたら」製鉄が盛行した。砂鉄を採取するため山を切り崩した「鉄穴」の跡は随所に見られ、このために山容が大きく変形しているところが多数ある。

歴史的にみると（図1）、当地方は出雲の辺縁地域であるが、古代には意宇川流域の豪族と関係をもつ勢力がこの地に成長し、律令時代には高田に郡家が置かれ、仁多郡の政治の中心となった。ここには出雲地方で数少ない人物埴輪や馬形埴輪を出土した常楽寺古墳や奥出雲で最大規模の横穴式石室を持つ岩屋古墳があり、周辺にはかなりの数の古墳が分布する。また高田には郡司建立にかかると考えられる奈良時代の寺院跡である高田廃寺跡がある。

また中世には当地には三沢氏を始め多くの武士がいた。三沢氏は14世紀に仁多郡に入り成長した有力な国人である。町内にはこの三沢氏の居城である三沢城跡をはじめ町内の所々に勢力を張っていた武士の山城跡や砦跡などが多数存在する。三沢氏始め多くの出雲の国人は15世紀後半には尼子氏の支配下に入ったと思われる。尼子氏と毛利氏は天文9年（1540）から一進一退の攻防を繰り返したが永禄5年（1562）に毛利軍が飯石郡赤来町から北進してくると三沢氏など多くの国人はたちまち毛利氏についた。この尼子、毛利の抗争に關係して築かれた城砦跡もあると思われる。なおその居城富田城が落ち尼子氏が滅亡したのはこれから4年後の永禄9年である。

このような地域の状況から鉄塔建設地に所在する遺跡としては、古墳、横穴墓、山城砦跡、鉄穴跡などが挙げられる。



III 鉄塔建設地点の詳細遺跡分布調査について

仁多町内52ヶ所の鉄塔建設が計画された地点についてあらかじめ県教育委員会で踏査を行った結果うち8ヶ所については工事範囲内もしくはその近辺に遺跡が存在するかあるいは存在する可能性があることが判明した。そこでこの8ヶ所について一部試掘を伴う詳細分布調査を実施し遺跡の有無や実態などを確認した。以下その内容について述べる。(図1)

1. 鉄塔番号275 (仁多町大字河内字下沢田)

鉄塔建設計画地には、鉄穴場に水を引くため尾根に設けられた水路の跡とその尾根に続く斜面で真砂を採掘した鉄穴跡が存在する。必要に応じて水路を切って水を引き、真砂を掘り起こして谷下方に流す作業を連続して行ったもので、尾根付近の鉄穴跡としては水路跡とも保存状態良好であった。

なお鉄塔はこの鉄穴跡の中に建設される計画だったので、工事区域を中心に鉄穴跡、水路跡の地形測量をしました水路跡を横断しその構造を調査した。調査の内容については第IVで述べる。

2. 鉄塔番号276 (仁多町大字河内字下沢田北山、山田分)

鉄塔建設計画地の丘陵の両側斜面中腹には水路跡が走り、これを連絡する鉄穴用水路トンネルが存在する。トンネルは斜面を長距離迂回させて反対斜面に導入する不便を避けるため工夫されたもので、ほとんど埋まり上方がわずかに開いているのみであった。水路トンネルは奥出雲には他にもあるが、普遍的に存在するものではない。

なお鉄塔はトンネルの上を尾根をまたいで建設され、全体的には遺構にかからないが脚の一つが南側のトンネル口の近くに設けられる計画になっていたので、水路跡、トンネル口を含む範囲の地形測量をしましたトンネルの発掘調査、水路跡を横断しその構造を調査した。調査の内容については第IVで述べる。

3. 鉄塔番号283 (仁多町大字三沢字家の上、下広) (図2)

建設計画地は、なだらかな尾根上で周囲には遺跡と判断される表徴はないが、隣接する東側尾根上に2ヶ所低い高まりが観察され、古墳の可能性のあったので試掘調査を行った。北東25mの位置にあるNo.1は13m×7m、高さ0.7mの不整形な高まりで、中央から南西に長さ5m、幅0.5mの調査溝を設けて土層を観察したが、約10cmの表土下には約30cm明褐色の砂質粘土層があり、その下は橙色のかたい砂質粘土の地山であった。地山までの深さはほぼ均等で境界面は平坦、どの層にも攪乱の形跡なく、自然堆積と判断された。No.1の北

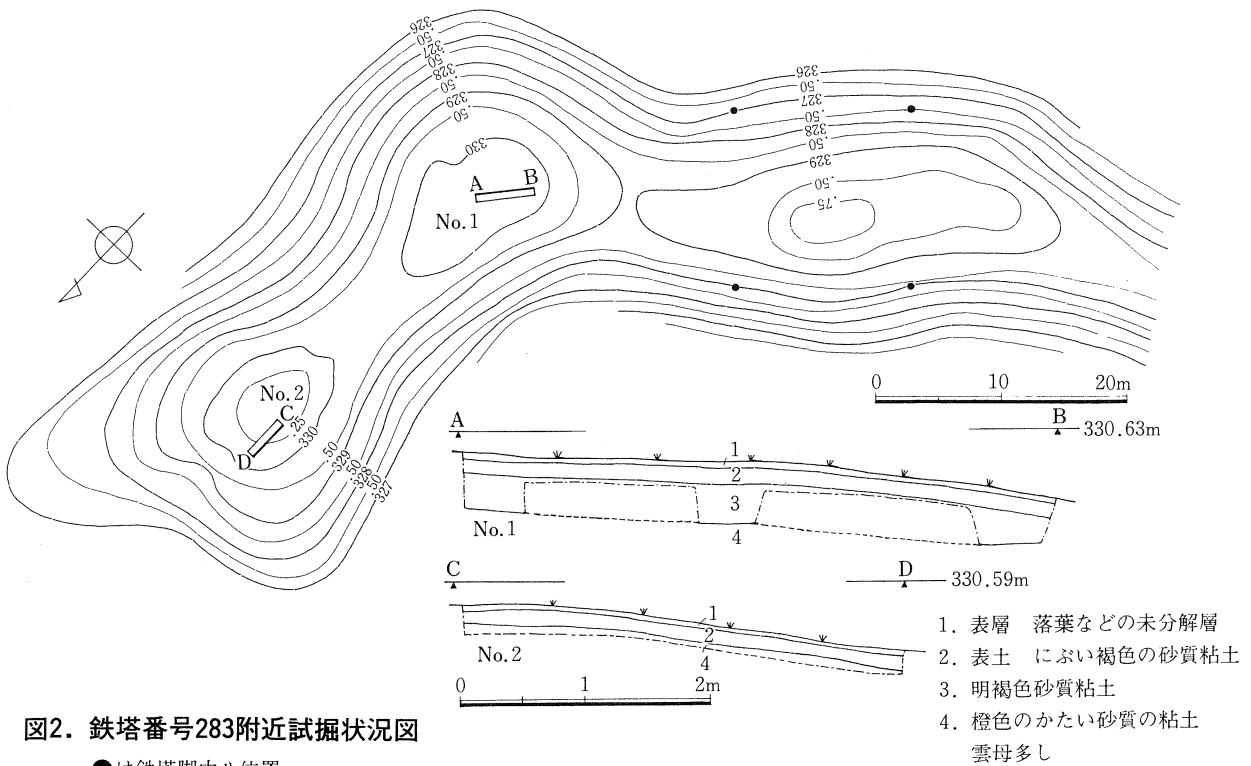


図2. 鉄塔番号283附近試掘状況図

●は鉄塔脚中心位置

25mにあるNo. 2は $12m \times 8m$ 、高さ0.5mの楕円形のもので、中央から北向きに長さ3.5m、幅0.5mの調査溝を設けて土層の観察をした結果、約10cmの表土の下は橙色砂質粘土の地山で、攪乱の形跡などなくNo. 1同様自然堆積と判断された。以上の調査結果からこの二つの高まりは人工の構造物ではなく自然地形であることが判明した。

なお鉄塔建設計画地点から南西60m離れた尾根頂点とこれから分岐する二つの尾根上に計5基からなる家の上古墳群が存在する。当初鉄塔はこの尾根頂点に建設される計画であったが、古墳が発見されたため協議の結果現位置に変更することになったものである。古墳群の調査については第IVで述べる。

4. 鉄塔番号284（仁多町大字三沢字下広、正覚、山廻り、山の神）

建設計画地は丘陵鞍部に設置されており、工事区域内には遺跡は存在しないが、付近の北側尾根上に4基からなる正覚古墳群が存在する。当初は古墳のある位置に建設される計画があったが、古墳が確認されたため協議の結果現位置に変更することになったものである。古墳群の調査については第IVで述べる。

5. 鉄塔番号291（仁多町大字三所字堤廻、澤堀、上澤堀）（図3）

建設設計画地は、須坂古墳群中第4号墳の上にあたる。須坂古墳群は谷間に北西向きに突出する丘陵尾根に分布する15基からなるもので、大まかに丘陵基部上（A群）、北側に分岐す支丘上（B群）、北西の支丘上（C群）の3群に区分される。15基中には前方後方墳とみられるもの1基、その可能性のあるもの2基、径あるいは辺が30mに近い大形の円墳や方墳などが含まれる大古墳群である。

建設設計画地にあたった4号墳については、試掘調査を行って古墳の規模等を確認した。その結果、この古墳は、上方の2号墳（23m×17mの方墳）との境に周溝を巡らせて区画した径約7mの円墳で、中心部分は一部地山も掘削したのち盛土をしたものである（土中から土師器片出土）ことなどが確認された。

本古墳群については、群全体の測量調査と4号墳の発掘調査を行った。調査の内容につ

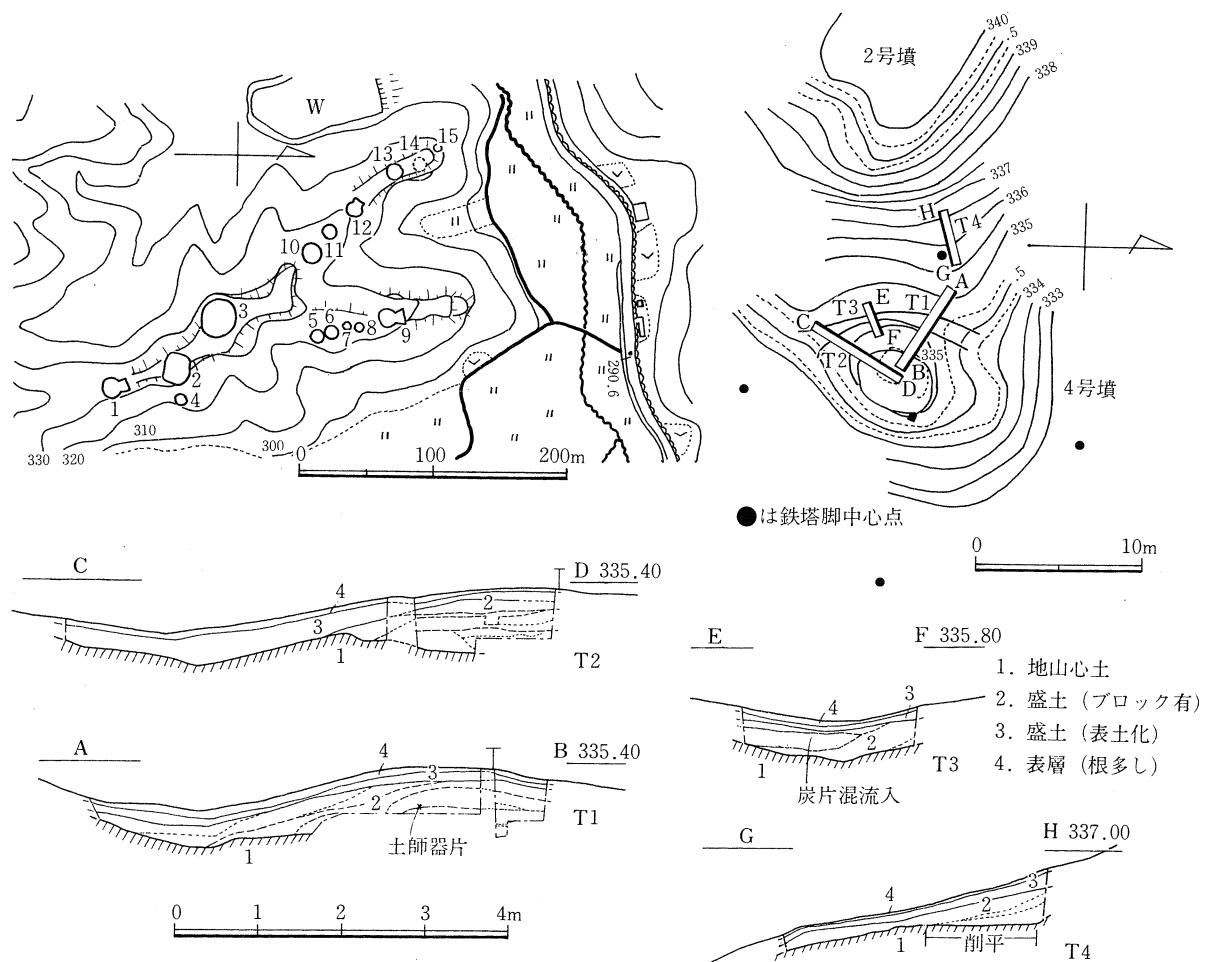


図3. 須坂古墳群分布図、4号墳調査溝土層図

いては第Ⅳ、第Ⅴで述べる。

なお鉄塔は当初基部中央の大形円墳の上に建設される計画であったが、古墳上であることが判明したため協議の結果現位置に変更になったものである。しかしながら古墳上にきてしまった。

6. 鉄塔番号295（仁多町大字上三所字平田山、次原山、上城山）

建設設計画地は、山丘中腹の29m×27mの平坦地で、縁に巨石がある（山全体に巨岩が多数見られる）。周辺はなだらかな自然斜面である。この平坦地の東側30m下方は北麓の日光寺横に開く谷の最奥部で、近年まで耕作されていた水田跡があり近くには畠の跡も見られる。この場所は須我非山城跡の

下方に当るが、造作の形跡は認められない。工事開始に先だって試掘を行い土層を観察したが、造成工事が行われた形跡は認められず自然地形と判断された。

7. 鉄塔番号299

（仁多町大字郡村字水谷、狐塚）（図4）

建設設計画地は、県道木次横田線沿いの山丘頂部で、連続する5段の郭と思われる地形が見られたので頂部平坦面に調査溝を設けて調査した。その結果、表層の下12cm～18cmは根が密に生い茂った表土層、その下の地山は風化が進んだ脆い土質で、縁辺へ緩やかに傾斜しており、当地方の急傾斜の山丘尾根の一般的な様相に

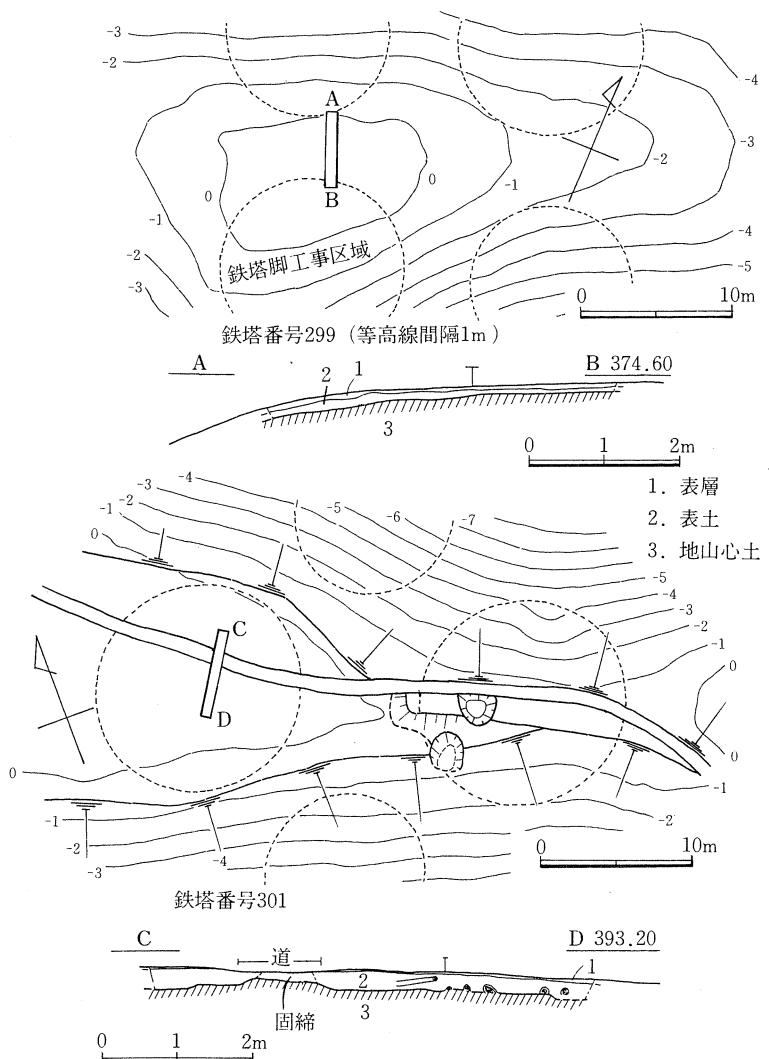


図4. 鉄塔番号299・301調査溝土層図

あたる。また観察された郭様の段状地形も自然地形であった。

因みに城砦は尾根続きの場合は堀切りで切断するのが中世城砦築城の通例であるが、ここではそれが見られない。

以上のような観点からここには城砦跡は存在せず、自然地形と判断される。

8. 鉄塔番号301（仁多町大字郡村字勇言谷、ヤクイ谷、ヤカイ谷）（図4）

建設計画地の尾根上に45m×18mの略楕円形の平坦面があり、砦跡の可能性があったので試掘を行って調査した。この平坦面には中央を縦走する幅90cmほどの古路があり、かつては里の人々に利用されていた。調査溝の土層では、通路部分は地表下約10cmの踏圧された表土があり、その下は真砂の地山心土であった。路の両側の平坦面は、根の生い茂った20cm～30cmの表土があり、その下の地山面は凹凸のある掘削面であった。これは開墾畠の様相であり、城砦に係わるものではないと判断される。

IV 遺跡各論

1. 下沢田遺跡（図5、図版2）

(1) 位置と環境

仁多町大字河内地内の山丘尾根に所在する鉄穴切羽跡と鉄穴水路跡の遺跡である。南側の谷間水田から25mの高さの低丘陵上にある。この付近は大吉川流域の山間地帯で、周辺には鉄穴跡が所々に見られる。

(2) 遺構

調査 鉄塔建設計画地点を中心とした遺跡の測量調査と水路跡の一部発掘調査を行った。

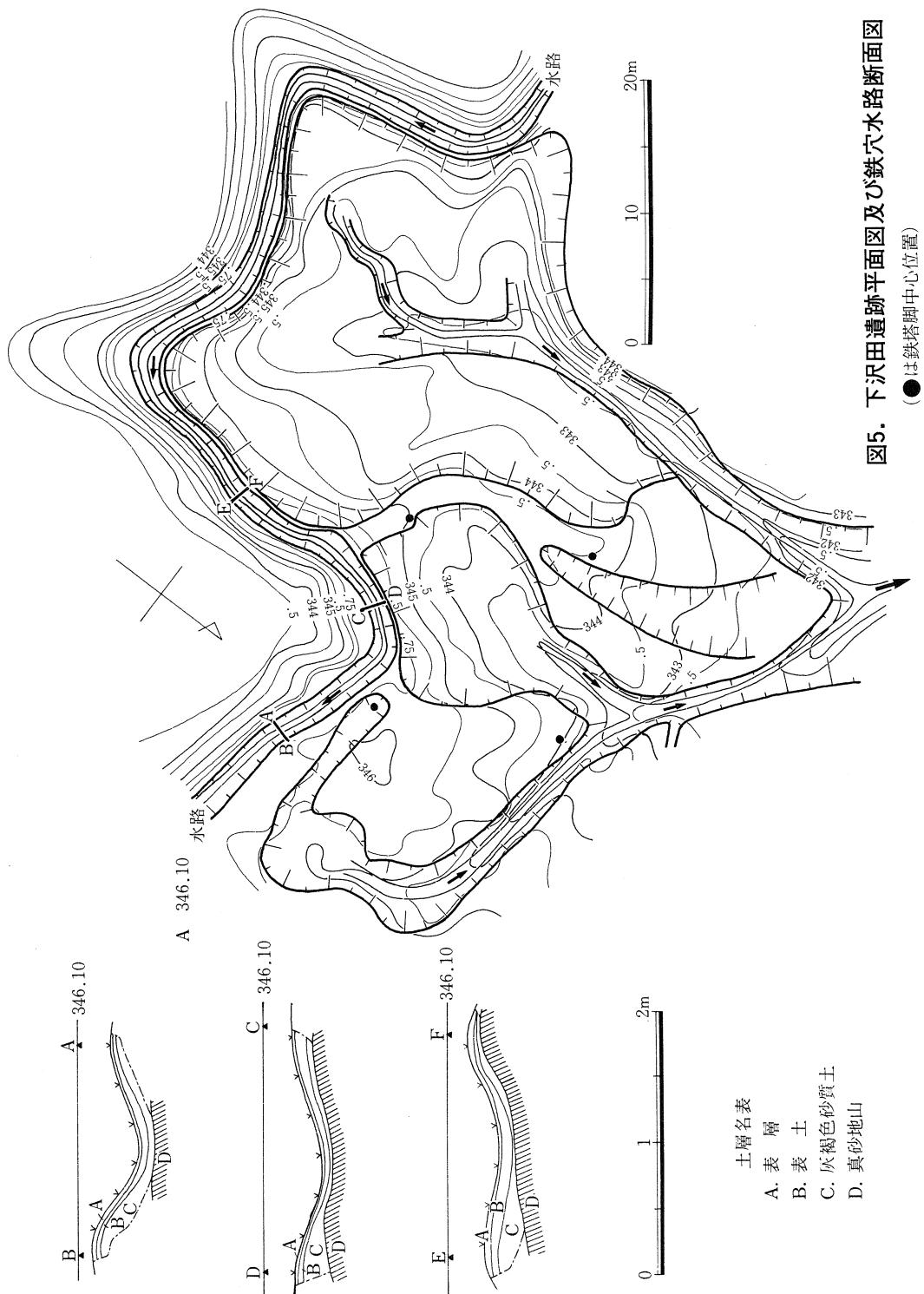
遺跡の概要 蛇行する尾根に鉄穴水路（鉄穴井手）跡が走り、下方斜面に深く掘削された鉄穴跡（切羽跡）がみられる。

鉄穴水路跡 水路は、現在南西140mのところで道路の切り通しにより切断されているが、源は切り通しからさらに西方に存在する。尾根あるいは丘陵斜面を掘りくぼめて設けたもので、当遺跡では尾根上につくられているため明確にその形をとどめており土手（両側の堤防様の高まり）の幅約1.6m、深さ20～30cmを測る。構造については、3ヶ所で横断面を観察すると、薄い表層の下に根が繁茂した表土層があり、その下は褐灰色砂質土層で最下層は真砂の地山である。土層の観察から元の水路の底面は褐灰色砂質土層の上面と判断され、その幅は約1.3m、深さ15～20cmと推定される。また底面の標高については、345.57m（断面AB）、345.60m（同CD）、345.60m（同EF）で、勾配は0.1である。相互に近距離の地点の数値で推計するのは危険であるが、いずれにしても勾配はゆるやかであったことがわかる。（俵 国一『古来の砂鉄製鍊法』には水路の勾配は120分の1（0.008）ないし300分の1（0.003）くらいと記す）

鉄穴跡 この尾根上の水路に続く下方斜面は複雑な凹地になっている。これは表土などを剥ぎ取ってその下の真砂の地山を掘り起こした鉄穴の切羽跡で、深さ2mにも及ぶところがある。ある範囲について真砂を掘り起こすと尾根の水路を切って水を引いて泥流をつくり、これを溝に流し込み（何筋かを合流させて）北側の谷下方に流し下したものと考えられる。北側谷底には砂溜などからなる砂鉄選鉱場があって砂鉄採取をしていたものと考えられる。

時期など 本遺跡のような水路と鉄穴切羽の跡はこの周辺にも存在するが、本遺跡は保存状態良好で、真砂の採掘、流し下しの作業状況がよくわかるものである。

本遺跡の時期については不詳であるが、保存状態から江戸時代終わり頃あるいは明治時代の可能性が高い。なお遺物の出土はなかった。



2. 下沢田北山遺跡（図6、図版3）

(1) 位置と環境

仁多町大字河内地内に所在する鉄穴水路跡と鉄穴水路トンネル跡の遺跡で、下沢田遺跡の北東約300mの急峻な丘陵斜面（南側麓水田との比高約40m）に設けられている。周辺には鉄穴跡が見られる。

(2) 遺構

調査 遺跡の測量調査と水路トンネル跡の発掘調査、水路跡の一部発掘調査を行った。

遺跡の概要 ほぼ東西にのびる丘陵の南北両側斜面に鉄穴水路跡があり、その水路をつなぐため丘陵を南北に横断して掘り抜かれた水路トンネル跡がみられる。水はトンネル口の高さから考えて南から北に流されたものである。

南水路跡 まず南斜面では、尾根から約7.5m下方の斜面に鉄穴水路跡がみられる。水路は西から東に流れ、水路トンネル口東12mで約1m下がって2筋に分かれる。水路は斜面中途に設けられているためかなり埋まっており、現状で幅80cm～1.0m、深さ5～10cmである。原形を確認するため、4ヶ所の横断面で土層を観察すると、未分解の落葉などからなる薄い表層の下に木の根が繁茂した表土層があり、さらにその下に灰褐色砂質土層があつて真砂の地山に続く。そして土層の形状から原水路の底面は灰褐色土層の上面と考えられる。この面において原水路を復元すると、幅70～80cmあるいは1m（下段の横断KL）、深さはいずれも約10cmである。また底面の標高を求めるとき、東から342.76m（断面EF）、342.67m（同GH）、342.64m（同IJ）、342.76m（同KL）で、断面IJまでの上段について水路の勾配をもとめると0.6であり、鉄穴水路の勾配としては一般的な数値を示す。

水路トンネル南口 水路トンネル南口（取水口）について記す。調査前、トンネル口は完全に埋まっていた上部に小さな穴が開いているだけであった。土砂を取り除いてみた結果、トンネル底面中央には約10cmの縁を設けた幅25cm、深さ30cmの溝が設されていた。トンネル底面（溝底）の標高は342.53mであった。トンネル内の天井の高さは約1.6mで、天井はドーム状に掘られていた。内部の状況について記すと、入口から11.5mまではほぼ同じ高さで、ゆるく東にカーブしていて、底には約50cmの厚さに土砂が堆積していた。これより先は天井は段差を設けて堆積土砂からの高さ約70cmと一段と低くなり、逆に西にカーブする。トンネル内部は、多少の落盤はあるが保存状態は概ね良好である。

北水路跡 次に北斜面について記すと、尾根から約8.5m下方の斜面に鉄穴水路跡がみられる。水路は西から東に流れるものであるが、現在トンネル口から東8mにわたって斜面の崩壊があり、この範囲では水路は消滅している。水路は南斜面同様土砂で埋まっているが、現状では幅70～90cm、深さは数cmである。水路横断面の土層の状況から、南斜面の場合と

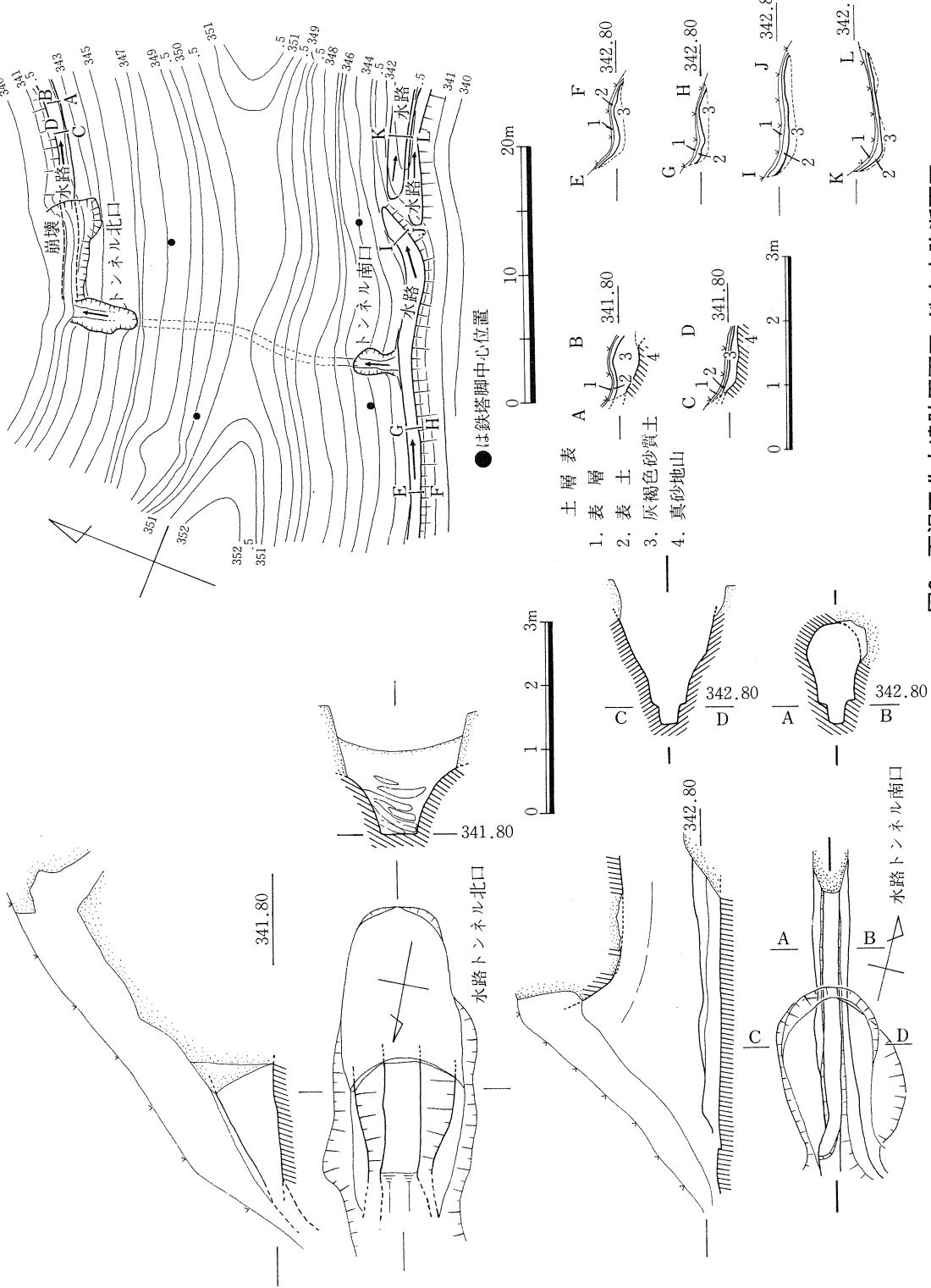


図6. 下沢田北山遺跡平面図・鉄穴水路断面図

同様原水路の底面は灰褐色砂質土層の上面と考えられ、原水路幅約60cm、深さ10cm以内と推定される。水路底面の高さについては、西から341.82m（断面CD）、341.80m（断面AB）で、勾配は計測ヶ所が少なく正確なことは言えないが、0.8で一般的な数値を示す。

水路トンネル北口 次に水路トンネル北口について記すと、ここは南斜面水路から導かれた水を北斜面水路に流す口であるが、土砂で完全に埋まり上方に小さな穴が開いているだけで、前方は崩れていた。そして南口に比べて土砂の量が多く前方から約2分の1の位置までしか発掘できなかった。したがって北口の構造については、前方部しか明らかにしないが、底面幅約60cm、両壁は大きくロート状に開くものである。底面の高さは、掘りあげた最奥で341.80mで水路とほぼ同じ高さであり、南口のそれより73cm低い。

トンネルの南北両口は、丘陵両斜面を結ぶほぼ最短距離の位置にあり、その距離は約25mで、勾配2.9である。トンネルはゆるく2回方向を変えてカーブしているようであるが、トンネル掘削の方法などについては不明である。

時期など 本遺跡の水路トンネル設置の時期については明らかでないが、技術的な問題や他の事例から^註考えて明治年間の可能性が高い。

水路トンネルは鉄穴用水の効率的利用のため工夫された方法で、鉄穴流が盛んであった仁多郡内では他にもその事例は報告されているが、しかしどこにでも見られるというものではない。本遺跡の水路トンネルは保存状態良好である。

なお遺物の出土はなかった。

註1 絲原家文書によると、明治28年に横田町大字大谷の雨川で鉄穴水路トンネル2ヶ所が建設されたといふ。（横田町教育委員会『隠地・鑑垣内製鉄遺跡調査報告』1983年、3ページ）

3. 家の上古墳群（図7、図版4）

（1）位置と環境

仁多町大字三沢地内に所在する。堅田の狭い谷間に突出する丘陵の先端に造営された6基からなる古墳群である。南約0.5kmには八頭塚横穴群が、北東約1kmには深谷古墳群が、また同じく北東約1.5kmには丸子山古墳群が存在する。このように周辺一帯にはかなりの古墳が分布する。

（2）古墳群の構成と規模

調査 測量調査を行って、古墳の分布と規模を調査した。

古墳の分布 古墳群全体の分布をみると、丘陵先端の標高334m、前方南西の谷間の平地からの比高約50mの丘陵頂点に径18mの1号墳があり、ここから分岐する2筋の支丘の尾根上に2支群5基の円墳が分布する。

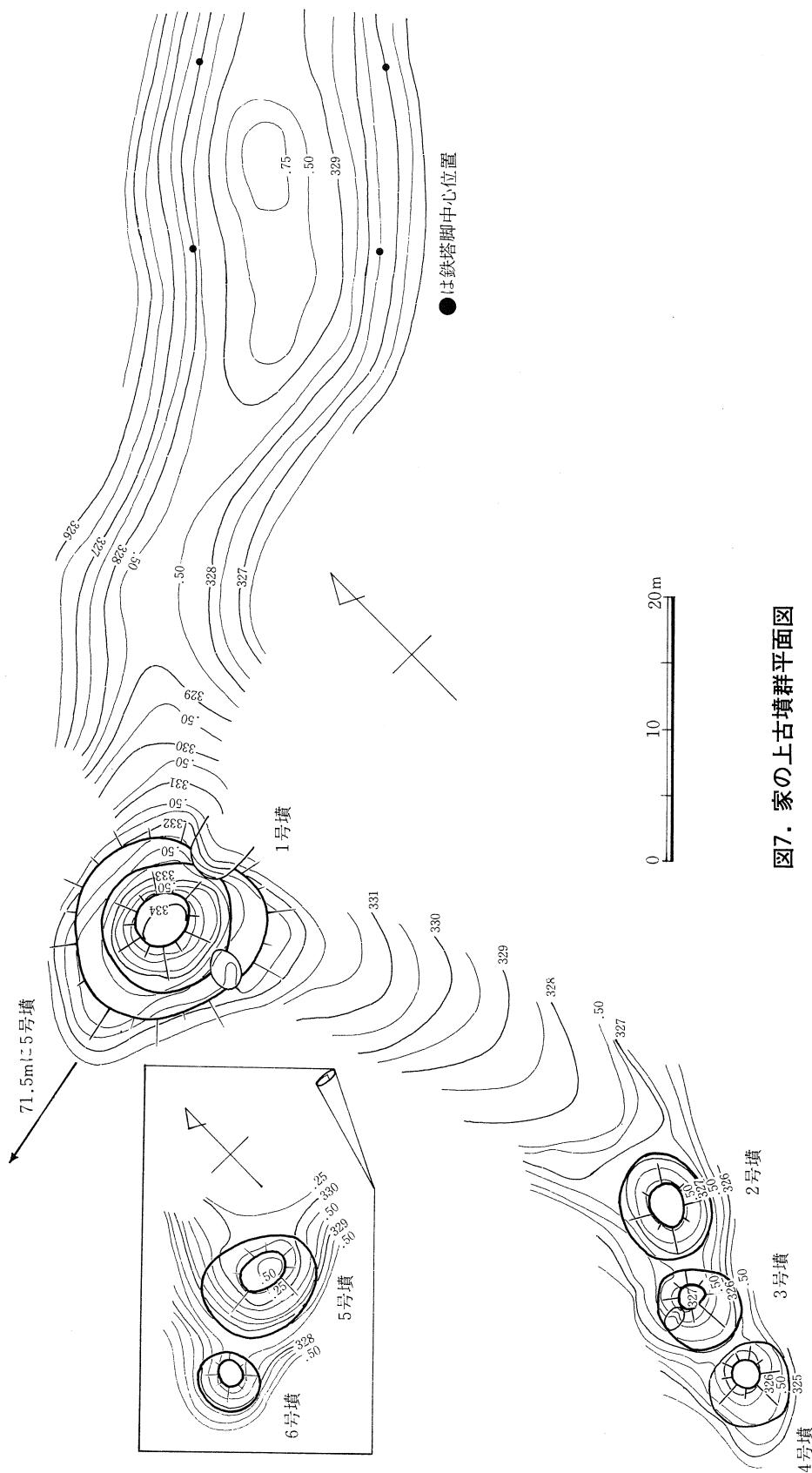


図7. 家の上古墳群平面図

まず南に延びる支丘尾根上には3基の円墳が並ぶ。1号墳から44m、6.6m低い位置に径8mの2号墳、2号墳から7mの距離に径6mの3号墳、3号墳と7mの距離をおいて径7mの4号墳が存在する。

また西に延びる支丘尾根上には2基の円墳が並ぶ。1号墳から71.5m離れた3.7m低い位置には径9mの5号墳、9号墳から9mの距離をおいて径5mの6号墳が存在する。

各古墳の規模等 次に各古墳について概観する。まず1号墳は周囲に幅2~2.5mのテラスを巡らし、これを含めた径15m×14m、高さ2mで、6基中最大の規模をもちかつ丘陵最高所に築造されていることからこの古墳群の盟主墳と考えられる。東斜面に小範囲の崩壊があるがそのほか掘削などの形跡はなく保存状態は良好である。

南支丘尾根上の3基はほとんど墳裾を共有する形で縦に並んでいる。高さを下方から見た寸法で示すと、2号墳は8m×7m、高さ0.7m、3号墳は7m×6m、高さ1m、4号墳は7m×6m、高さ0.8mでいずれも発掘等の形跡見られず保存状態良好である。

西支丘尾根上の2基も間隔を置かず縦に並んでいる。5号墳は9m×7m、高さ1.5m、6号墳は5m×4m、高さ0.7mでいずれも保存状態良好である。

時期など 本古墳群の時期については、小円墳で構成されていることなどから当地方の同規模の古墳の例に照らして古墳時代後期後半7世紀ごろと推定される。

本古墳群の被葬者は古墳時代後期において堅田一帯を支配した有力者（族）と考えられるが、古墳の規模、立地等から被葬者の身分、地位などを想定してみると、盟主墳と考えられた1号墳の被葬者は族長的立場にあった人物で、2つの支群の古墳のそれは氏族を構成する有力家系の長クラスであったのではなかろうか。

4. 正覚古墳群（図8、図版5）

(1) 位置と環境

仁多町大字三沢地内に所在する。円墳4基からなる古墳群で、前述した家の上古墳群と同一丘陵の基部尾根上にあり、中間の鞍部をはさんで北東260mに位置する。

(2) 古墳群の構成と規模

調査 測量調査を行って古墳の分布と規模を調査した。

古墳の分布 本古墳群は、45mの距離をおいて2群4基の円墳から構成される。第1支群は、丘陵基部の尾根頂点から少しきがった場所に1号墳があり、隣接して南8mの位置に2号墳が存在する。第2支群は、1号墳の北西45m、約2m高い尾根上に3号墳、隣あって北西12mに4号墳がある。

各古墳の規模等 各古墳についてみると、第1支群の1号墳は10m×9m、高さ1.8m、東

側の墳裾約3分の1にわたって長さ約11m、最大幅3.5mのテラスをもつ。西側墳裾は山道のため約8mにわたって消失している。2号墳は8m×5m、高さ0.8mの小円墳で西側が大きく崩壊している。第2支群の3号墳は9m×8m、高さ1.3mで北側墳裾が約7mにわたって消失している。この北西にならぶ4号墳は10m×8m、高さ1.8mで保存状態良好である。

時期など 本古墳の時期については、前記家の上古墳群同様当地方の他の例に従して古墳時代後期後半7世紀ごろと推定される。

本古墳群の被葬者も前記家の上古墳群の場合同様堅田地域の支配者層と考えられるが、2基ずつまとまって近接して造営されていることが注意される。被葬者の関係については2基ずつ組になっていることから夫婦であったことも考えられる。

5. 須坂古墳群

所在地は仁多町大字三成下三所地内字上沢堀・沢堀・堤廻の山林である。

北北西に向って長く張り出す標高340～320mの丘陵上で、そ

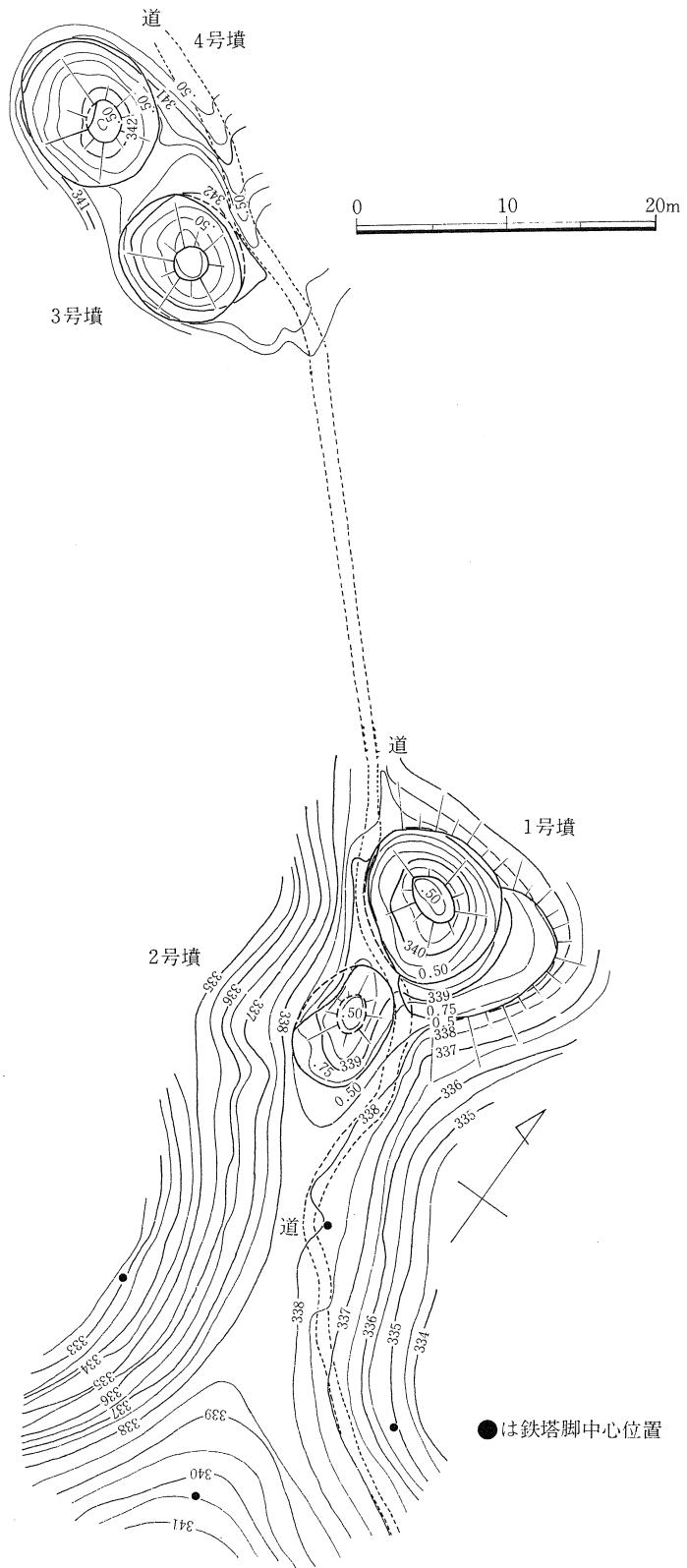


図8. 正覚古墳群平面図

の先端約100mは稜線がY字形に分岐している。谷間からの比高は概ね30~40mである。

この丘陵上から北東方向に下三所集落が一望できる立地で、眼下に水田が拓かれている。

この丘陵上延べ約470mの間に大小15基の古墳が築かれている。これの配置と規模について明らかにするため地形測量を行った（図9）。古墳の配置は、大まかに南から北に向って尾根の分岐するまでの1~4号墳（A群）、分岐してさらに北の先端まで5~9号墳（B群）、分岐して北西の先端までの10~15号墳（C群）の3群からなっている。

A群：最高所の1号墳と群中最大規模の2号墳及び3号墳、そして2号墳裾に一段低く4号墳からなる。また2号墳と3号墳との間、及び3号墳からB・C群への分岐点までは、それぞれ広い削平面を造っている。

1号墳…墳頂平坦面は7×5mで、前方に一段低く幅6m長さ4mの方形テラスが付く。

後方は尾根筋を切斷し、前方は削り出し整形とみられる21×14m規模の前方後方形の墳形である。

2号墳…頂部平坦面は12×7m、裾部は23×17m、高さ2m強の略長方形台状で、判り出し整形のものである。弥生期の台状墓の可能性がある。東墳裾には4号墳が造られている。

3号墳…頂部平坦面は18×16m、裾部では30×27m、高さ3mの略円形台状で、大きく削り出し整形である。東裾は幅7m余の削平テラスとし、南と北の削平面と連続させている。これも2号墳と同様、弥生期の台状墓の可能性がある。

4号墳…小円墳で、2号墳裾に張り出す瘤状地に造られていて、1~3号墳とは異質である。発掘調査を行った。また山腹斜面には横穴墓もあった。（V章参照）

B群：真北に繞く幅10~8mの尾根上に、5~9号墳が並ぶ5基の古墳群である。

一段低い最先端には幅8~11m、長さ30m余の平坦面と、一段下った三角形小削平坦が造られている。これが後世の開畑によるものか否かは不明である。

6号墳…直径10~11m、高さ1m強の円墳で周溝が認められる。

5・7・8号墳…6号墳の周囲に造られた直径8m前後、高さ50~70cmの小円墳で、いずれも周溝があるとみられる。

9号墳…頂部は3~4mの平坦面で、裾部直径約9m、高さ約1mの円墳に、前方に5×4mほどのテラスが付く張り出し付きの墳丘である。この張り出し部を含むと長さ約18mとなる。

C群：分岐して北西へ下りながら延びる尾根上に、10~15号墳が先端まで並ぶ。

10・11・13号墳…それぞれ直径12m前後、高さ約1mの円墳で、後方の尾根を切斷して整形したもの。10号墳は山路によって変形している。

12号墳…上記にほぼ同じ円墳の前方に方形のテラス部を造るもので、9号墳とほとんど同じである。

14号墳…尾根端に位置し上記とほぼ同規模であるが、高さは0.5m以下で低い。北下方山腹には削平段があるが何によるかは不明。

15号墳…尾根端の14号墳からさらに大きく下った丘腹の突出部に設けたもので、直径約5mの極く小さいマウンドである。

以上のように、須坂古墳群は一部に弥生墓と思われるものも含んで延長500m近い尾根上に営まれており、^註前期古墳群に類似するものであるが、処々に削平とみられる平坦面をつくるなど、今後さらに検討を要するものである。

註 近い例としては斐伊中山古墳群（木次町教育委員会・1993）などがある。

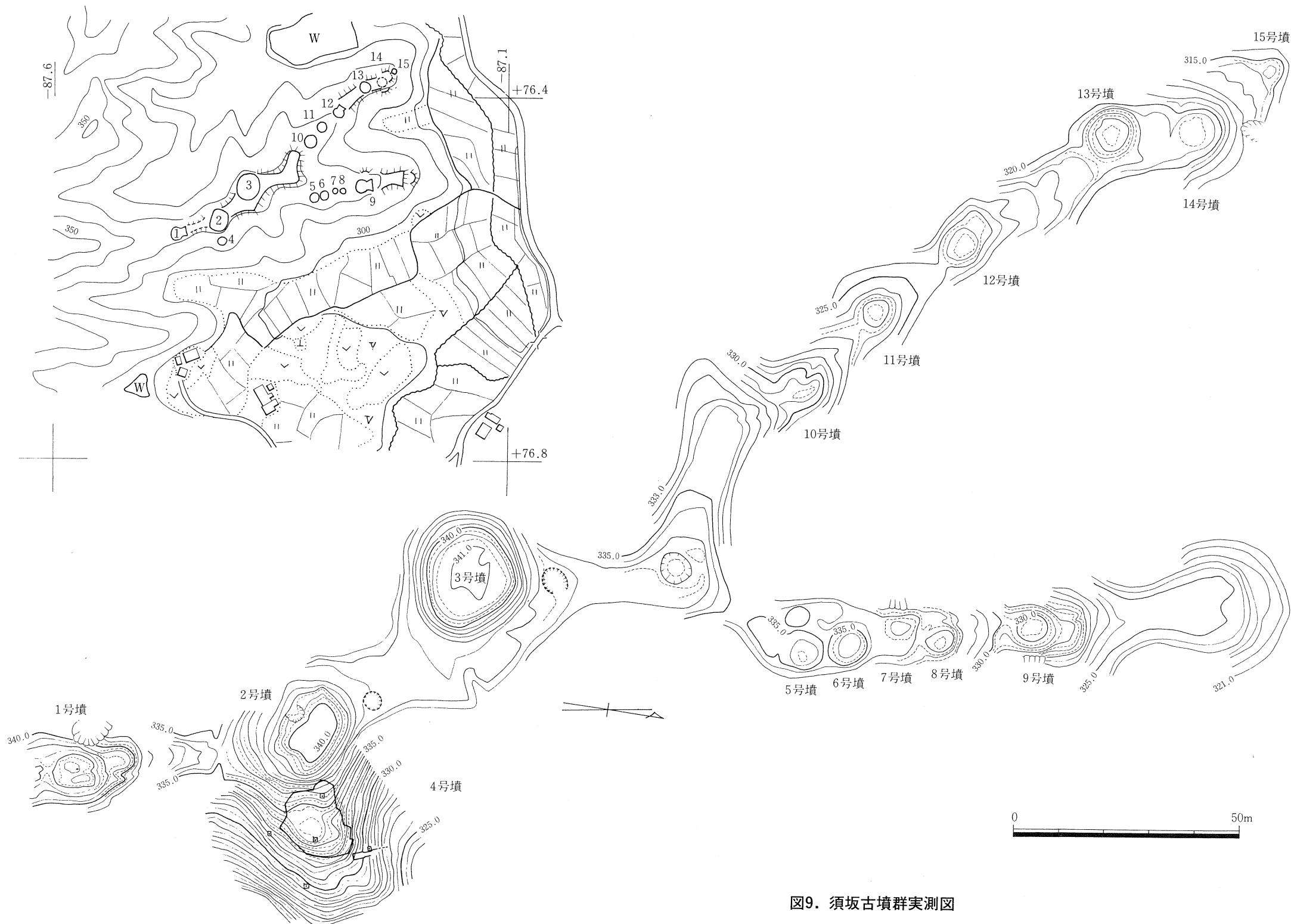


図9. 須坂古墳群実測図

V 須坂遺跡の調査

送電線鉄塔予定地について前述（III・IV章）のように踏査や詳細分布調査の結果、計画地点杭No.291地点は古墳群の中にあたるとしてその位置を若干移動したのにもかかわらず、やはり古墳上に位置することが判った。

しかし隣接鉄塔の予定地点を確定した後のことであり、No.291地点の再変更が困難であることから、この須坂古墳群第4号墳の発掘調査を行い、その結果にまつこととした。現地の発掘調査は平成8年6月10日から7月30日まで行った。

この4号墳の調査過程で、墳丘盛土の下に建物跡が検出されて、複合した遺跡であることが判った。

その後、鉄塔建設の作業中平成8年12月2日に掘削中の山腹で、地下約5mのところに横穴墓が発見された。須坂1号横穴墓とよんで緊急の調査を行った。

このように須坂4号墳と埋没していた建物跡I・II、及び1号横穴墓は施工によってその大部分が消滅することとなった。

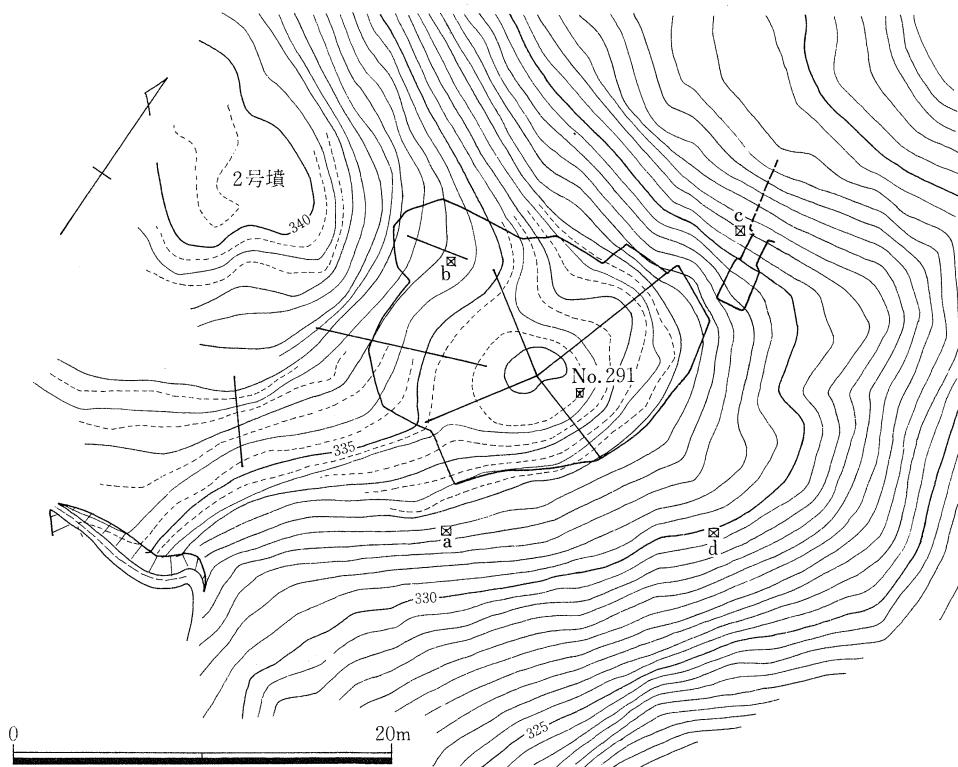


図10. 調査前地形図

A. 須坂4号墳の調査

1. 立地と地形 (IV章図9参照)

標高335mのこの4号墳は、稜上にある大形の2号墳の南東裾部に約5m低く瘤状に張り出す地形に営まれたもので、下方水田面からは約35mの比高である。

地表測量では卵形のような円墳とみられたが、伐木・表層剥ぎ取り後の墳形実測の結果、直径約7m、墳頂平面は約3mの円墳に、北々東前方へ約60cm低く2×3mの小平面が張り出し付設されていた。また後背方向2号墳との境は、地山を掘り切って半周する周溝となっている。この周溝底から4号墳頂面までは、現況で高低差約50cmであった。(図10・11)

付近の自然土層序は大きく三層で次のようである。

表層 (A層) … 暗褐色壞土 (根群が発達している)

表土 (B層) … 黄白色砂質土 (C層の風化した真砂土)

母材 (C層) … 糜爛した花崗岩 (通称真砂地山)

2. 墳丘の築造について (図11)

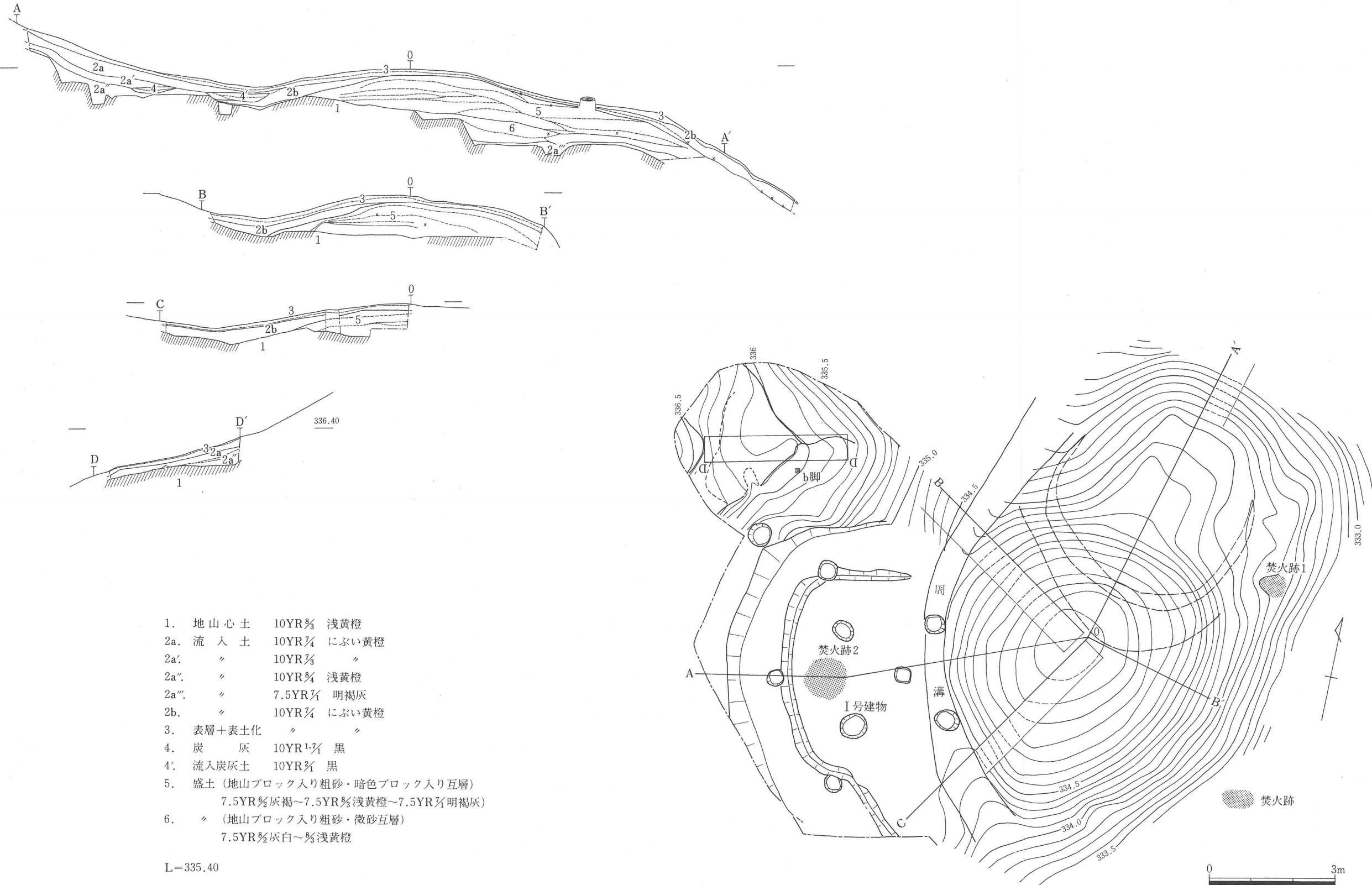
墳頂から5方向について土層の積み重ね状況をみると、いずれもその大部分が盛土によって積み上げられていた。この盛土の厚さは中心部で約1.1m、前方張り出し部分では1.2~0.7mを測る。

中心部あたりについてみると、盛土層が掘削を受けた地山心土上に6~8層認められる。各土層は整層ではなく、厚・薄・レンズ状などあり、下方から暗色がかった旧表土の多く混じるやや厚い層があり、上へ順に地山の風化土である黄白色砂質土に地山心土の塊が混った掘削土が薄く敷かれ、次に暗色土のブロックが多く含まれる土層が重なる。そして順次同様な積み上げ土層で盛り上げ、最上面は現況では薄くなっているが、心土を掘削した黄白色真砂土を盛り上げてマウンドとしている。

墳丘斜面も同様であるが、墳頂から流下した真砂土層が厚くなつておらず、本来のマウンド表面と流下土との界は明瞭ではなかった。

また、南西後背方向はⅠ号建物跡を切断した周溝部分で、最下面にやや赤橙色を帯びた細砂質土が薄く認められた。これは地山心土の硬い部分が風雨によってわずかに風化したものと思われる。この上に墳丘から流下した真砂土と後背部2号墳側からの流下した同様の砂質土が堆積している。この土層間には2号墳裾の焚火跡遺構や、それから流下する炭灰土が挟まれている。

墳丘の前方張り出し部についてみると、一段低く最下面のⅡ号建物跡を墳頂部下の地山



心土を荒く削り出して埋立てており、心土の大小塊が多く混入する埋土で前方に傾斜する土層が重なっている。この上に墳丘部の盛土層がさらに重ねられており、墳丘の急斜から緩斜へ移るあたりには墳頂部からの流下土の堆積もみられる。さらに最先端についてみると、下方谷間方向への自然崩壊であり、斜面下方に向って流下土が漸次厚くなっている。

墳頂から南方向Cライン、及びBラインについてもほぼ同様の土層の積み上げが認められる。周溝の掘り上げは上記Aライン方向が最も高位で、C・Bラインではその地下り最下端位置にあたり、よってここに堆積した真砂質流下土とその表土化した層は厚くなっている。

周溝はこのようにI号建物跡を切斷して掘り込んだもので、Aライン部を中心とし、C及びBライン部へそれぞれ弧状に下降している。地山心土の掘削部で測ると、A部で副約1.8m、C部で2.1m、B部では1.5mであり、溝中にはやや尖り底状に削り込まれている。

なお、墳頂から東側B'ラインについては、下層の互層積み土は頂部平坦面内で終り、その上の真砂土の盛り土が厚く急斜して落ちる谷間方向に流下している。

このように盛土で築かれた墳丘は次のようである。

墳頂の平坦面は墳頂部の盛土流亡のため明瞭ではないが、やや長円形で、墳裾は周溝方向へ3.0m、前方方向へ3.5m、合計6.5~7.0mで、溝底からの高さは1m以上とみられ、前方平面部との落差もほぼ1mと推定される。そして前方の張り出しが1.8×2.3m方形面で、両脇部の整形からすると高さは約0.5mに設定されているようだ。

周溝は南西方向2号墳の裾部との界にあり、4号墳丘のほぼ三分の一にあたる弧長約7mの間で、幅は40~60cmである。

このように4号墳は南北方向直径7.0m、その先方に方形張り出し部が2.3mで、合計9.3mとなる。この墳形は円墳に前庭を付けたものとでもいいくらいであろう。

3. 埋葬主体等の探索

墳頂部の平坦面は現地形で2.4×1.9mほどの不整円形で、その一部は近年までの山通り路として踏み窪められていた。盛土を剥ぎながら下方に及んだが、墳丘築造の盛土中に土器片は混在するものの落ち込みや掘り方ではなく、主体部のプランはついに検出し得なかった。

なお、墳丘北東斜面1.2m下った裾部に直径40cmほどの抉り込みを造り、焚火を行った跡1があり、これと墳頂を挟んで対をなす南西方向の周溝外堤にあたる位置にも直径約50cmの焚火跡2があった。この両者は墳頂中心からそれぞれ4.0mの距離であり、4号墳に関与する1対のものと思われるが、焚火跡2の場合周溝内の堆積土層から、墳丘築造と同時ではなく何程かの時間経過後の焚火であることが判る。この焚火は周溝で切斷された建物I

の上に若干の流下した砂が堆積した上を窪めて行ったものである。

これらから採取した木炭片の観察では、焚火跡1ではクリ、焚火跡2ではクヌギが認められた。これらは太さ2cmほどの枝条である。(図版12参照)

4. 4号墳丘含有の遺物

墳丘斜面には盛土の流下した砂質土が厚く、特に前方西側の周溝あたりには土砂とともに土器片が多く混入していた。墳頂面には土器片等はほとんど見当らず、外縁端近く林木の株元で若干採取した。

これらはすべて墳丘盛土の土層中に混在したものである。

5. 埋没建物跡

(1) 建物跡I

4号墳周溝の西側で2号墳墳裾との間のフラットな面があった。これは主として2号墳からの流下土で埋没した建物跡Iであった。この建物跡はその半分が4号墳築造の際に周溝部として掘削され失われている。

2号墳側の地山に大きく抉り込んで造られたこの建物跡Iは、床面幅4.5mの隅丸方形とみられ、主柱穴4穴は間隔2.20~2.25m正方形の配置で、床面からの深さ50~60cm、直径30cm以上もある。またこの中央位置には方形をなす柱穴状のピットが1つある。

この床面の後背(西側)部は幅60~90cm、床面からの高さ35cmのテラスが半周しており、奥中央と奥隅角部のテラス前縁にもそれぞれ柱穴がある。奥中央のものは床面中心から2.85mの位置で深く、両側の2穴は間隔5.00mでほぼ床面高に等しい深さで浅い。前者は棟持ち柱、後者は外壁隅の副柱かとみられるものである。

中央から前半の部分は上記のように、4号墳の周溝掘削で床面は消滅しているが、特に深い棟持ち柱の柱穴はその痕跡が認められてよいはずなのに認められなかった。

また、検出した床面は汚濁した床面ではなくすべて新鮮な色調で、當時居住生活した所とするには異和感が残るものであった。すべての柱穴内の埋土には、柱根部の腐朽した暗色や抜根痕等は認められなかった。

この建物の床面は南側中央部から外へ折れて続き、床面外周の小溝もそれに沿って戸外域の谷間方向へ続いて消滅している。これが建物への出入口かと思われ、南側谷間から通路があったのであろうか。

(2) 建物跡II

4号墳前方部分から張り出し状部分の盛土の下に建物跡IIが埋没していた。

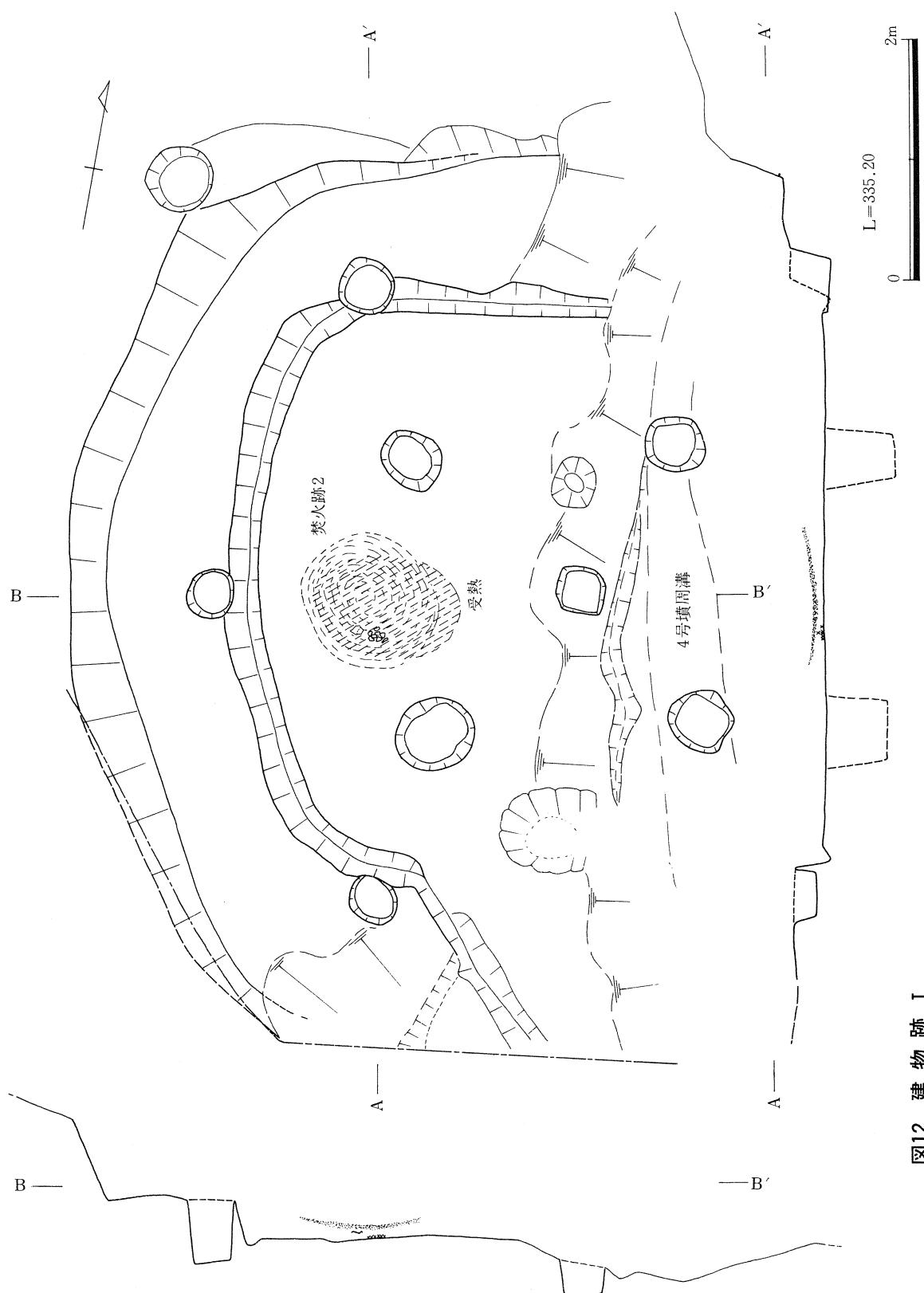


図12. 建物跡 I

床面は北端が地下り部分にあたるため、約四分の一ほど失われているが、幅は4.3m、奥行きもほぼ同様と思われる。主柱穴は1穴失われているが、 2.25×2.60 mの配置であった。

主柱の柱穴のほかに、4穴の柱穴状ピットが埋め戻して踏圧された床面から検出された。このことから数次にわたる改修が行われたことが判る。

奥壁部は一段高く弧状にテラスが削り出して造られており、これら奥壁端や東側壁上端部には杭穴状ピットが1～2m間隔で6穴ほど認められ、屋根材の長尾樋の痕跡と思われる。

床面はやや歪んだ隅丸方形で、 $4.4 \times$ 約4.0mとみられ、外縁に小溝が巡る。床面中央には二段掘りのピットがあり、その東側床面約1m範囲は厚さ1.0～1.5cm炭灰が堆積し、床地面は強く焼けていた。しかし中央ピットの内側は熱を受けた状況ではなかった。

この中央ピットは、先ず床面から 70×70 cm隅丸方形、深さ5～6cm掘り下げ、次にその中央に直径45cmほど円形に深さ20cmほど掘り込んだ二段掘りのものである。このピットは通例では炉の位置に相当するが、内部に炭灰土が落ち込んでいるもののほとんど火熱を受けていないことから、炉跡とすることは無理であり使途は不明である。

このほか、中央ピットから斜め前方約90cmの床面に、扁平長円形の川原石が置かれていて、石の上面には磨面が認められた。また後背一段高いテラスの前縁あたりに川原石1個があり、その前方あたり床面よりやや浮いて6個採取された。叩き石のようである。土器については、床面の西端近く、細かく碎けた甕の胴片とみられる6片だけであった。

6. 溝状遺構（図13）

建物Ⅱの後背部に東側へ下降する溝が地山面に達して造られていた。

断面逆台形、底幅22～26cm、上幅約40cm、地山面への掘り込みの深さは5～10cmで、北東へ約11°の傾斜をなすもので、長さ約2.3mである。

この溝の始点や終点は不明であるが、表土面からとみられ、長さはこれ以上にあり、谷間に向って下降するものと想像された。

この溝の性格については明瞭でないが、建物Ⅱの後背であることから、そのための地表水を除く排水路とも思われる。しかしそれにしてはあまりにも幅広であり疑問も残る。また仮りに建物Ⅰ方向への登路とするならば、溝内面に踏圧痕もなく急であり、何よりも溝下方が急峻な斜面で谷に下ることから不適当と思われる。不明の遺構としておく。

7. 小削平段について

建物Ⅰの北西約1.6m高く、地山心土に達する粗削り出しの小削平段が造られていた。

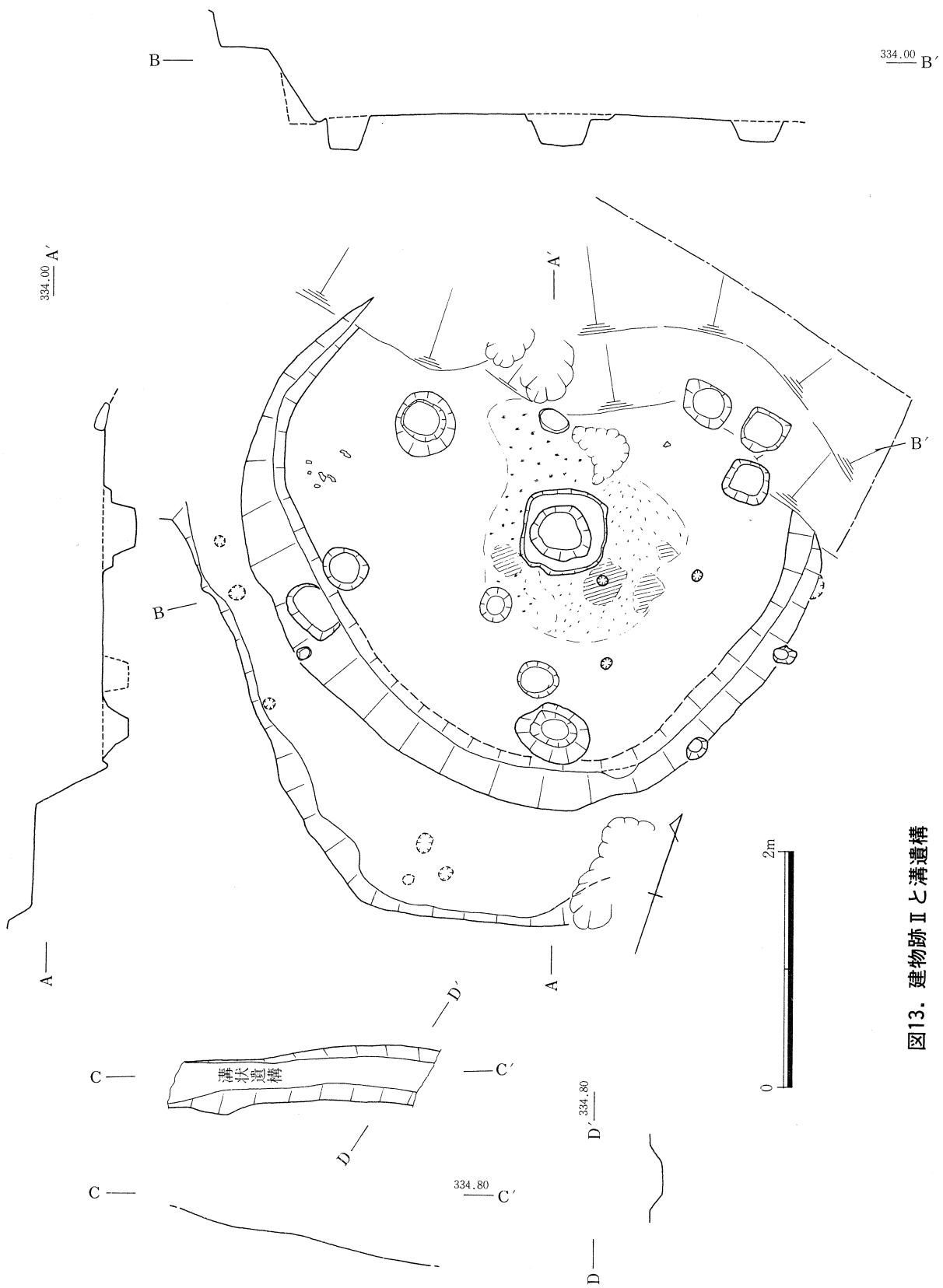


図13. 建物跡Ⅱと溝状遺構

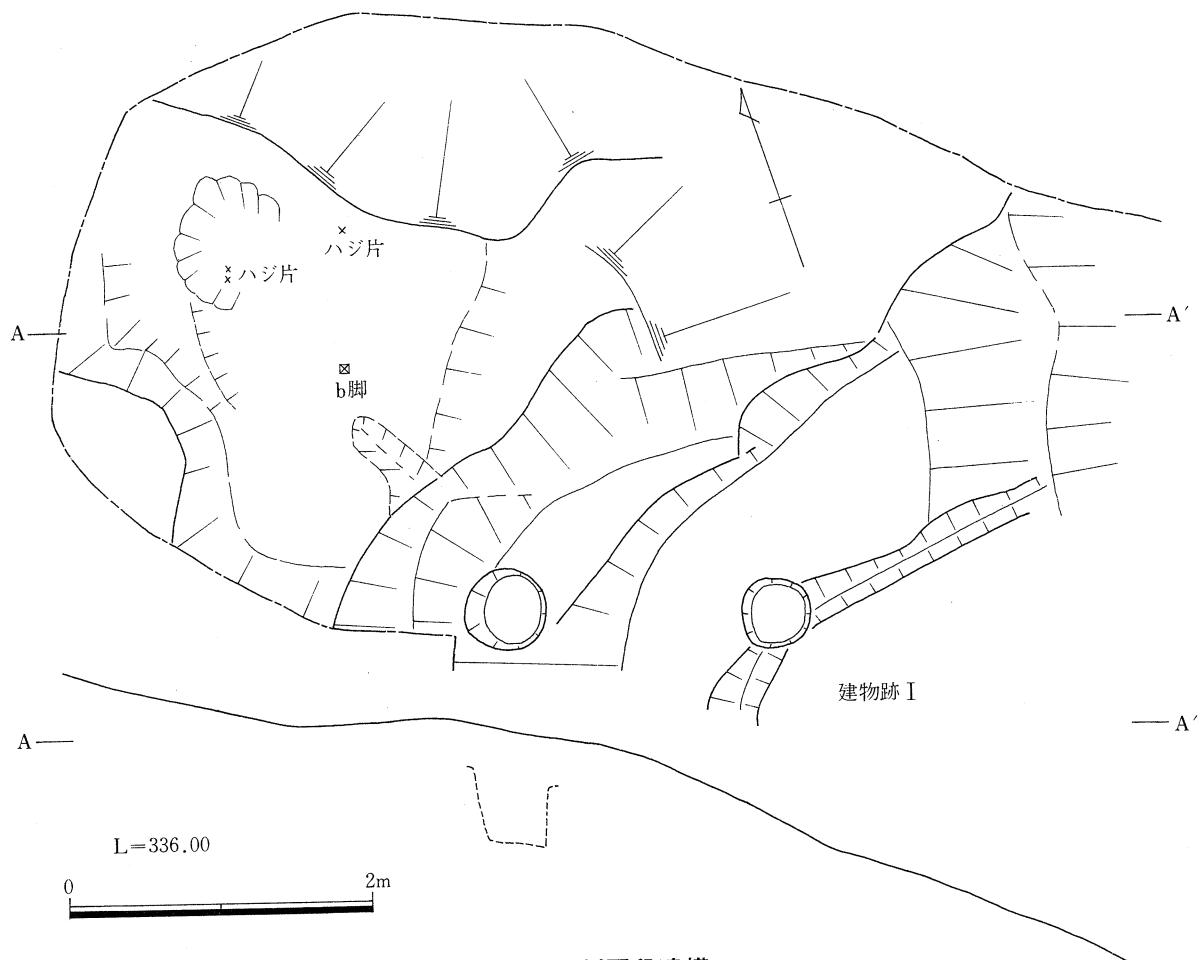


図14. 削平段遺構

3×2 m略三角形をなすもので、2号墳の墳丘斜面中ほどに位置することになる。削平面上には何らの汚染も見られず、削り出しのままの面と思われた。

薄く堆積した明色砂質土の下面から甕体下胴部の破片を検出した。この小さい平底底部片は、つい上方の2号墳頂面からの転落かと思われる。他には何らもなく祭祀跡などでもないようだ。

この削平段は2号墳の墳丘整形によるものかとも考えられるが明瞭ではない。

8. 各遺構の前後関係

以上のように時期の異なる遺構が重複していた。これらの遺構の前後関係についてみる。

- ① 建物跡Ⅰを一部切断掘削して4号墳の盛土としている。
- ② 建物跡Ⅱは4号墳の盛土下に埋没している。
- ③ 焚火跡1は4号墳丘面で行われている。
- ④ 焚火跡2は建物跡Ⅰの堆積土上で行われ、4号墳周溝内へ墳丘から盛土が流下した

ところに炭灰が流入している。

- ⑤ 2号墳丘腹の小削平段上の流入砂質土は薄く、建物跡Ⅰ面上に連続する同層は厚い。
そして4号墳の周溝で切られている。
- ⑥ 小削平段と建物跡Ⅰとの切合はない。
- ⑦ 建物跡Ⅰ及び小削平段には、さらにやや暗色のバンドを経て、その上にそれぞれ厚い明色真砂土の流下があり、上方の2号墳頂部からとみられる。
- ⑧ 建物跡ⅠとⅡ及び斜溝遺構とはお互いに切合い関係はみられないが、4号墳築造のため削平を受けている。

以上の状況から次のように考えられる。

建物Ⅰ・Ⅱ及び溝遺構の前後関係は不明であり、建物Ⅰより若干後れて2号墳中腹の小削平段が造られる。そののち暗色バンド（草生による）の時間を経て4号墳丘を築き、建物Ⅰは切断、建物Ⅱは埋没した。

4号墳の盛土が何ほどか流亡するころ焚火1・2が、墳頂を挟んで対をなして行われた。そののち2号墳頂から真砂土が多量に流下している。

即ち、建物跡Ⅰ・Ⅱ・溝遺構 → 2号墳丘整形？ → 4号墳丘築造・焚火跡1・2 → 2号墳頂部で何らかの掘削攪乱 となる。

9. 遺物について

出土した遺物は前記の如く、大部分は墳丘盛土中に包含していたもの又はその流亡土中に混入していたものであり、遺構に伴うものは極めて少なかった。

遺物は土器片が主で、若干の河原石と鉄鏽塊とで合計578点である。採取区分によって集計すると表1のようであり、明らかに上方の2号墳から転落したものとみられるもの15点、埋没していた建物Ⅰに伴うもの21点、建物Ⅱに伴うもの44点であり、2号墳からの転落か4号墳盛土中からの流下か判別し難い周溝外縁での採取品が57点であるのに対し、4号墳築造の盛土中からは合計441点であった。

盛土中採取のもののうちには、墳丘築造で切断掘削された建物Ⅰや建物Ⅱの後背部にあったものも含まれていると思われるが、それを判別することはできなかった。

これらの遺物について実測し得たのは甕形土器・器台・壺・高坏片・石礫器などである。

表1. 出土遺物一覧表

出土区分	口縁	口縁~胴	形	土器部	底部	器台	厚	手	高	手	壞	手・他	捏	不明	土器計	石礫	器	鐵錫	総数
2号壙削平段~裾部	10	1			1	1						3	15						15
建物I(含焚火跡)	18	3				(図16-27)	(図17-1)												21
建物II後方テラス	1	3			31														43
4号	34	136			26	3		5		3	57		264						264
填丘盛土中			(図15-2-3-4-5-6-8-9-10-12-13-15) (図16-21-23)			(図17-3)	(図18-1)												
前方盛土中	7	105			22	6		9											170
溝部流入人			(図15-1-7-11) (図16-19-20-24-25) (図16-26-28-29-30)			(図17-2)	(図18-2)												
溝外縁	2	3																	8
周溝末端部・他	15				27	3													5
総数	60	31			306	23		36		13	5	6	83	563	11	4	578		52

(1) 龜形土器 (図15・16)

1～18はいずれも複合口縁の器である。

1～3は口縁帯下端がくり下げ状をなし、4～15は横に突出する形態であり、いずれも胎土には砂粒を含み、内面頸部以下は削り放しである。

1～6は口縁帯にクシ条線を巡らせ、口縁端は丸味をもっておさめている。2は内外面

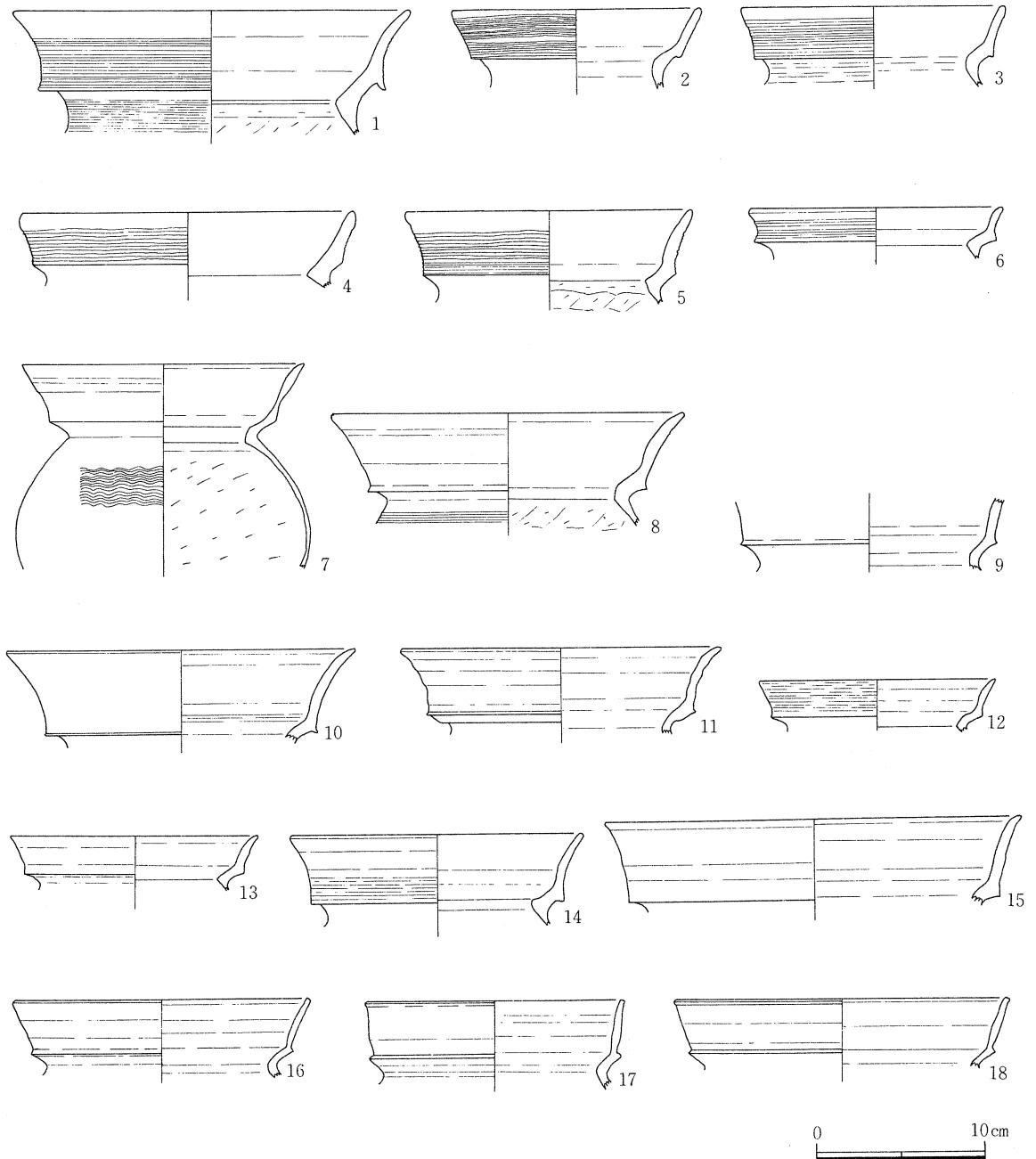


図15. 龜形土器 (1)

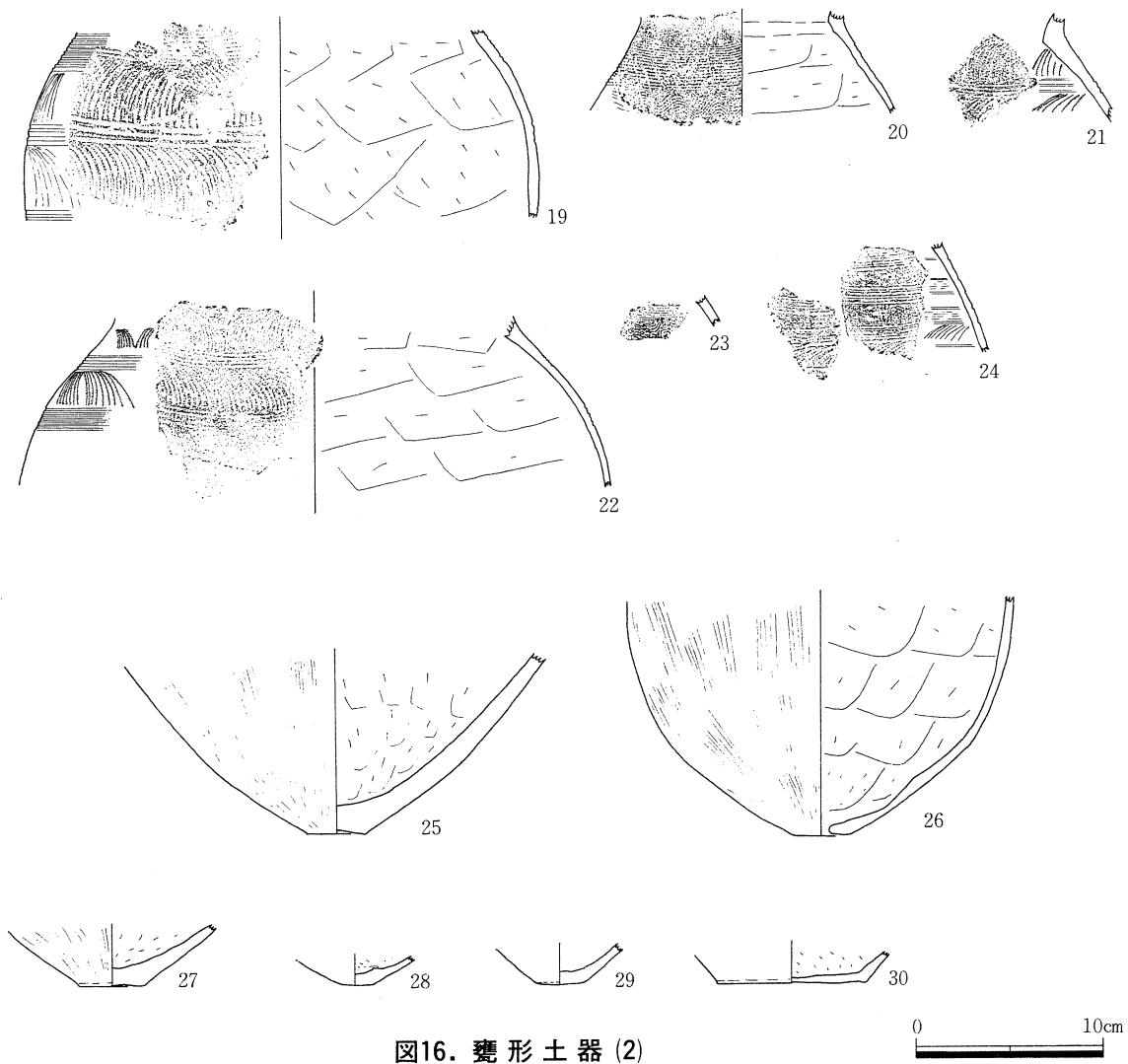


図16. 蔵形土器(2)

0 10cm

にベンガラと思われる赤色塗料が認められる。また外面に煤の付着するもの3・4・5がある。

7・8は口縁がやや大きく開き、やや尖り気味で、口縁帶には施文はなくナデているが、肩部にクシ描波文7や多条線文8の施文があり、7は煤が付着している。

9～15は口縁が大きく外反し、口縁帶は無施文でヨコナデで、平滑であるが11はナデツマミのためにぶい段状をなし、12にはハケ目痕がみられる。14は口唇をややおさえて尖らず、外面には煤が付着している。

16～18は器壁がやや薄く、胎土の砂粒は細かく厚さも均等で、口唇端はナデて平坦面を造り外方にはみ出しがある。口縁帶は工具でナデて下端の稜線で強く圧えてアクセントをつけ、稜は下からくり上げて上向きである。

施文のある胴片についてみると、内面はいずれも削り放しであり、器壁はいずれも薄く、頸部～胴上部に施文している。

19は多条線の下に2段に弧状のジグザグ押圧文でち密な文様帯を巡らせるもの、20・23は多条線の下に同様のクシで波文を描くもの、21・22は中央の細沈線で上下段に区分して貝腹縁の押圧文を密に施すもので、同一個体であるかもしれない。24は6条単位の条線を4段以上巡らせ、この下段間に弧状押圧を連続させるち密な施文である。

底部の25～27は直径2～3cmの小さな凹み気味のしっかりした平底であり、ハケ目の残る下腹端はほぼ直線的に下端に至る。2は二次的に穿孔されていて祭祀を思わせる。

28・29は直径1.5～2cmのやや丸味のある底面で、ナデの下腹端との境は必ずしも明瞭ではない。30は直径8cmの大きな平底で、下腹部の器面は入念なナデであるが、下端はみ出し状にやや乱れている。甕形ではなく壺の底部であろうか。

これらの時代觀は甕形土器の1～7、肩～胴部の施文のあるもの、底部25～27は的場式の一群であり、8～15、底部の28～30は鍵尾式に準じ、16～18は小谷式に準ずるものであろう。特に底部26は祭祀用に二次穿孔されたものであり、墓上供獻を思わせて注目される。

(2) 器台 (図17)

器台は4点すべてが山陰特有の鼓形器台である。

1・2は受部で、多条線文で上下を区画したクシ描波文を巡らせる。1は口帶下端の突帶が下垂する様式で、2も同様かと思われる。なお1は暗赤褐色のベンガラと思われる塗彩が施されている。

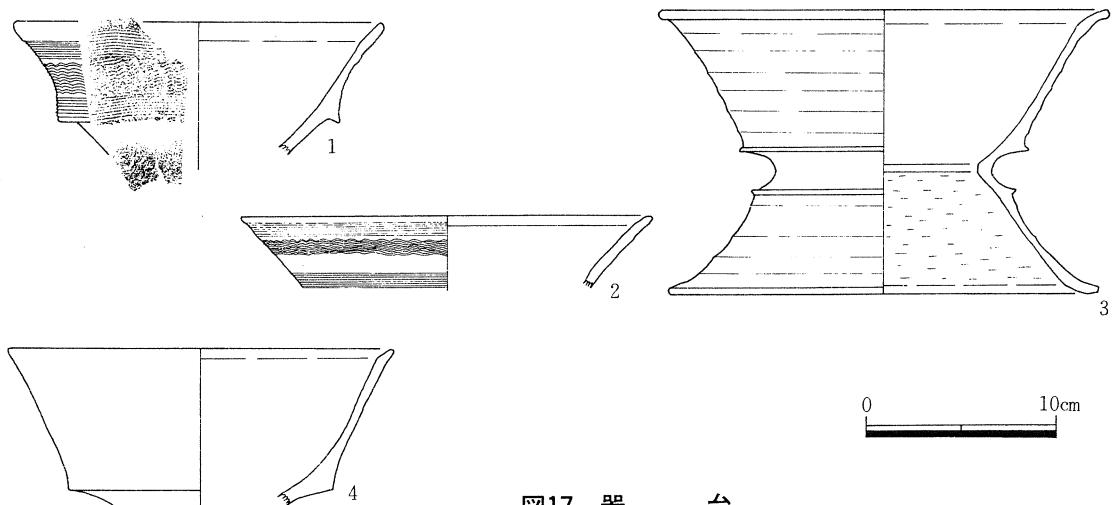


図17. 器台

3・4は施文のないもので、3は受部突帯・脚部突帯ともに横に尖り、筒部は2.0cmと短い。4の突帯もほぼ同様である。

このように1は的場式に、3は鍵尾式に比定でき、2・4もほぼそれに準ずるものとみられる。

(3) その他の土器 (図18)

1は厚手の土器片で、大型の壺形土器かと思われる。口径32.0cm、肩部での器壁は厚さ1.7cmを測る。微砂質の胎土で焼成良く浅黄橙色を呈し、胴内面は削り放しである。年代不詳。2は漏斗状に開く壺の口縁部とみられる。口端は上面を厚くして平坦面を造り、そこに1条の浅い凹線を巡らせている。外面にはカキ目状の擦痕が認められる。類例に乏しいが、大まかに弥生後期かと思われる。

3・4は極く小型の壺である。3は玉葱形をなす胴部で、内面は粗く削り、外面下半は削り上半には具縁による逆ノ字状の刺突を巡らせている。偏平特殊壺の類であろう。施文から鍵尾期あたりであろうか。4は口径8cm弱の壺口縁で、胴以下は不明である。器壁はぶ厚く外面はナデている。口帶下端の稜は横に尖る。小谷期あたりであろうか。

5は砂粒の少ない密な土を用いた手捏ね土器で、祭祀用である。

6・7は低脚環で、いずれも細砂を少し含む胎土である。环の内外面はともにナデしているが、7の脚部裏面は指頭の押圧痕が著しい。時期は明確ではないが、胎土からすると大東式に近いものかとも思われる。

8は高環で、環部は欠けている。細砂を少し含む胎土で、焼成によって明るい橙色となっている。脚中ばから大きく開いて脚端まで厚さをほぼ一様に削り出している。筒部は抉

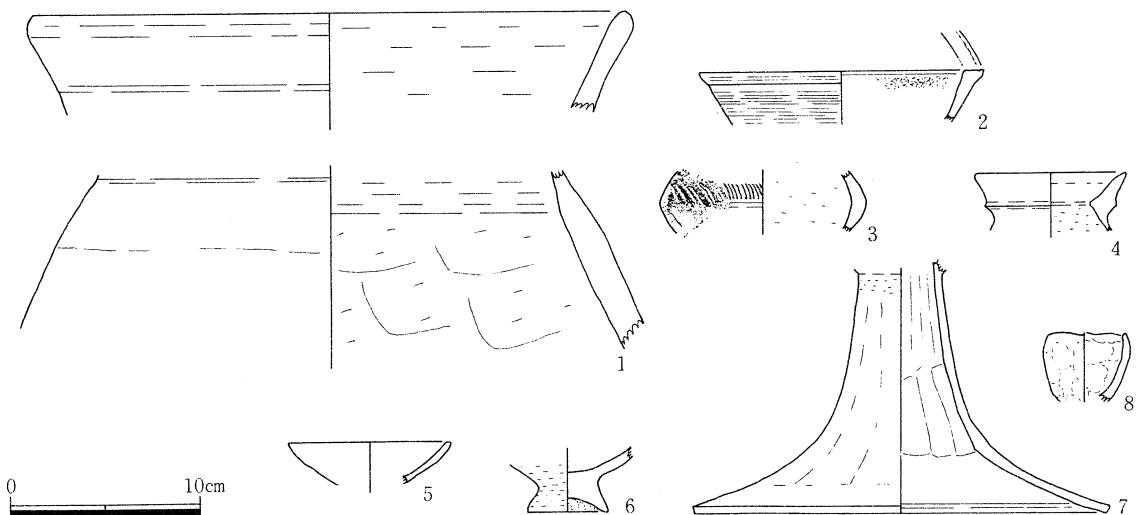


図18. その他の土器

り削り、脚部はケズリのちナデている。外面は筒部がタテ磨き、脚部はヨコ磨きであり、
壊部との接続部には小さな圧痕がみられる。小谷期より以前とみられる。

(4) 石 磔 器 類 (図19)

1・2は砥石であり、1は他の礫と共に建物Ⅱの後方テラス部で、2は墳丘盛土中から採取したものである。1はやや微細な質の砂質岩で表裏2面が使用されている。金属刃物用とすれば中砥に相当しよう。2はややち密な粘板岩で、現今も用いている細目砥と同質である。4面が使用されて、中くびれ状に磨耗している。鉄刃物用とみられる。

3・4は墳丘前方の盛土中より検出した、長さ2.5~3.3cm、幅1.7~2.0cm、厚さ約1.0cmの長円形花崗岩質の川砂利である。使途は不明であるが、祭祀に用いたのであろうか。

5は建物Ⅱの後方テラス部で砥石1とともに採取した礫器で、偏平な一面が磨面で、頂面は敲打痕がある。この敲磨石は花崗岩質の川原石で、重量1kg、長さ約12cm、厚さ5.7cmのもである。

なお、この採取部位から周溝末端部へかけての盛土中で同様の川石5個を採取したが、図示していない。これらも本来同じ場所に置かれていたものと推察された。

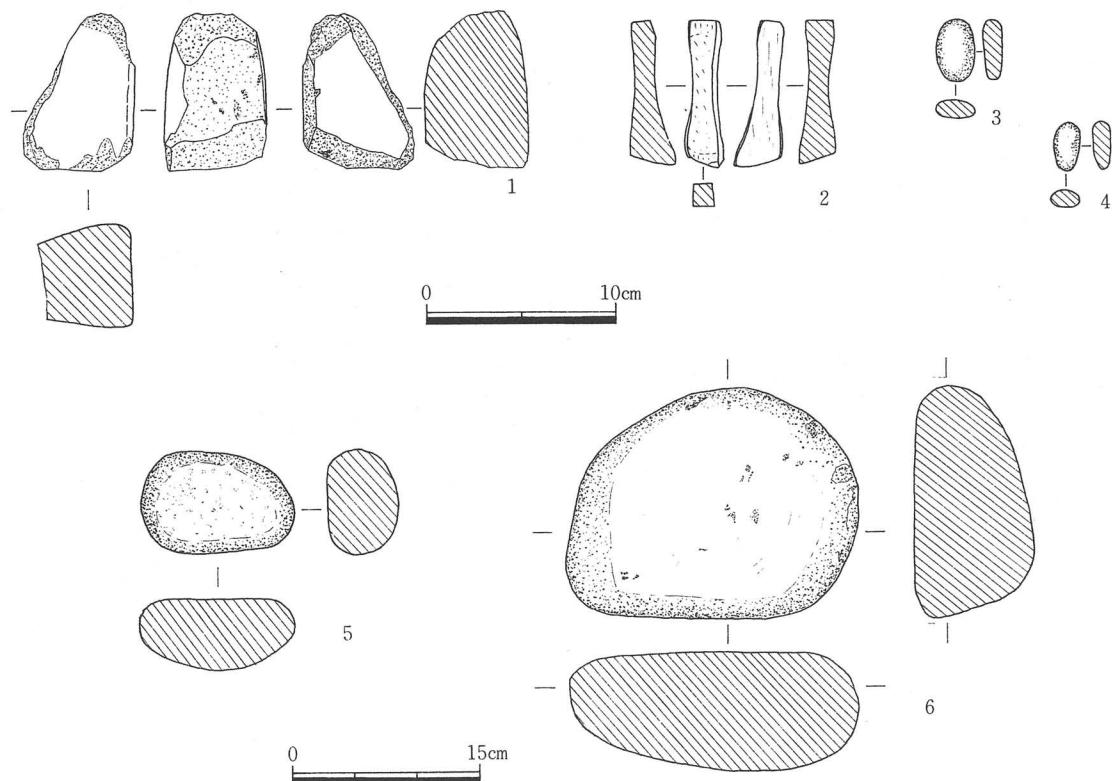


図19. 石 磔 器 類

6は建物Ⅱの床面中央付近に置えてあったもので、重量6.6kg、閃緑花崗岩で23×18cmの偏平な川原石である。平坦な上面は使用された磨面で若干の打痕がある。石皿様の使用が推察される。

このほかに周溝末端部から検出した小鋸鉄塊4個がある(図版12)。ほとんど磁着性はない。原形は不明であるが板状の破片かと思われる。

B. 須坂横穴墓の調査

1. 横穴墓の位置と発見状況

送電線鉄塔計画杭No.291地点は、前述のように須坂4号墳の墳頂が中心となった。そして発掘調査後平成8年12月、施工によって掘削中にこの横穴墓が発見された。(図10参照)

この横穴墓は4号墳の北北東12m地点で、斜面地表下約5m、4号墳頂からは9mの地下である。鉄塔脚部建設の基礎部を直径5mの円形で垂直に掘削し、横穴墓の羨道部にゆき当って開口したのである。玄室内は崩落土で覆われていたが、破損レベルは床面には達していない、羨道や前庭の一部についてはその平面プランを検出することができた。

なお、掘削予定区域外となる前庭の部分については、施工作業のなかばであり、崩土のおそれもあることから調査が行えなかった。

2. 遺構

この横穴墓はほとんど真北(磁方位N6°00')に開口するもので、主軸は地表の等高線に対して直角に入っている。地山心土は風化花崗岩で、所謂真砂地山である。

玄室は妻入りの三角テント形で、幅1.5~1.3m、奥行き2.3m、棟の高さは1.6mであり、前・奥壁は内傾する。

羨道は長さ1.7m、幅0.95~0.75mで、胴張り形をなす。天井高は破損のため不明である。羨門には板がかりの抉り込みがあり、床面の溝に続いている。

前庭部は部分的にしかわからないが、羨門脇0.45mほど広く削り出している。前方への長さは1.2mほど確認したが、図上に復元すると4~5mはあるようだ。

これらの床面は、玄室内から羨道へかけてわずかな下り勾配であるが、前庭は約8m高く造られている。

1. 表層（腐植層）
2. 流入土（表土化）(10YR 5/2 灰黃褐色)
- 2'. '' () (10YR 5/3 にぶい黃橙)
- 2'' '' (10YR 5/6 明黃褐)
3. 敷砂（白砂）(10YR 8/2 灰白)
4. 堆積土（細粒砂質土）(10YR 8/4 浅黃橙)
- 4'. '' (粗砂粒含砂質土) (10YR 7/4 にぶい黃橙)
5. 地山心土（真砂土）(10YR 8/4 浅黃橙)

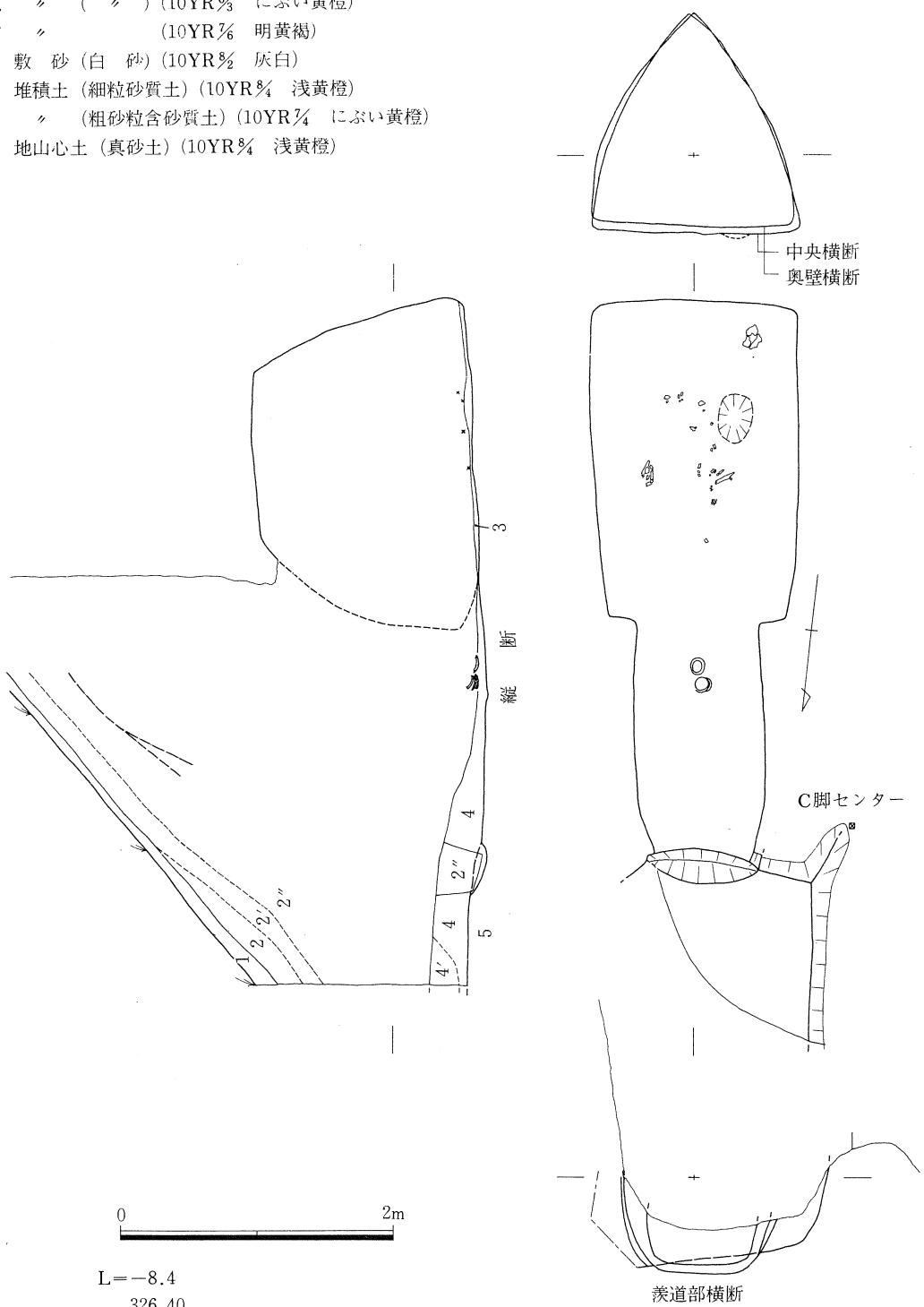


図20. 須坂1号横穴墓実測図

3. 玄室内の状況

崩落土を除くと、玄室内は一面に黒色を呈し、根群が密にはびこっていた。その間にあって右奥壁近く白色の頭骨片がわずかに認められる程度であった。

厚さ1cmほどの根群のからんだ腐植質を除くと、わずかに残存した骨片が玄室中央付近約1×1m範囲に認められ、特に中央寄りに盛り上がる腐朽物堆積中からは遊離歯牙が多く検出された。またこの盛り上り部の右隣りの床面は掘り窪めてあった。

歯牙や顎片は玄室中央部分に散在し、長管骨は前寄りの2か所に見られた。長管骨片の最も大きいものは、太さ約3cm、長さ約8cmで、両端とも損じている。また左寄りの4本の管骨片は、土圧によってつぶれ破碎していた。

以上の骨片はすべて床面上に薄く地山土の白砂を敷いた上にあり、ほぼ全面にわたって敷砂を行っていた。

なお、玄室内には人骨以外には何らの遺物もなかった。

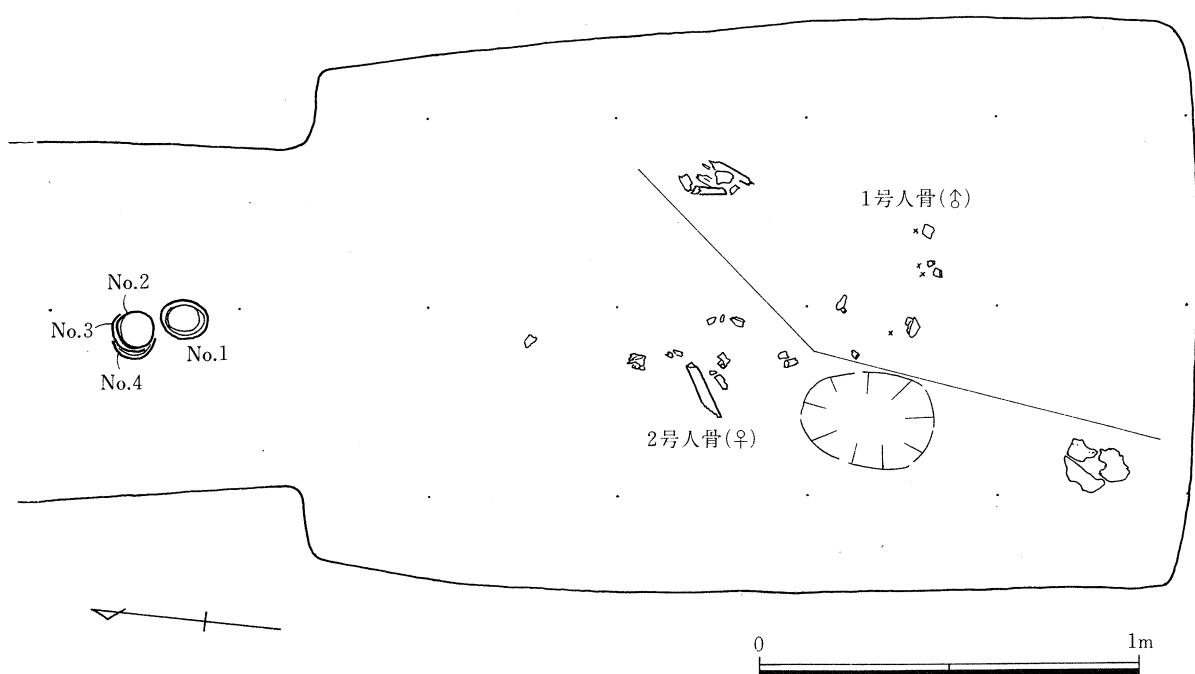


図21. 玄 室 図

4. 土器の供献

玄室内には土器等は全くなく、玄室入口に近い羨道の奥中央に須恵器の蓋壺2組4枚が重ねた状態で置かれていた。

环身は直径12cmで立ち上りは短く内傾する。蓋は直径10~11cmで、环蓋とともにほとんど

全面ナデ仕上げの小型化したもので、Ⅳ期古段階に属する。

羨道部は入口から流入したとみられる粒度の細かい明色の砂土が、入口側に厚く奥に薄い堆積であり、その表面が若干暗色化していて追葬時の面とみられた。この土層位の奥端部に地山土の粗砂を薄く敷いて、この蓋坏が供献されていたことから、追葬時の供献土器と判断された。

このほかには何らの遺物もなかった。

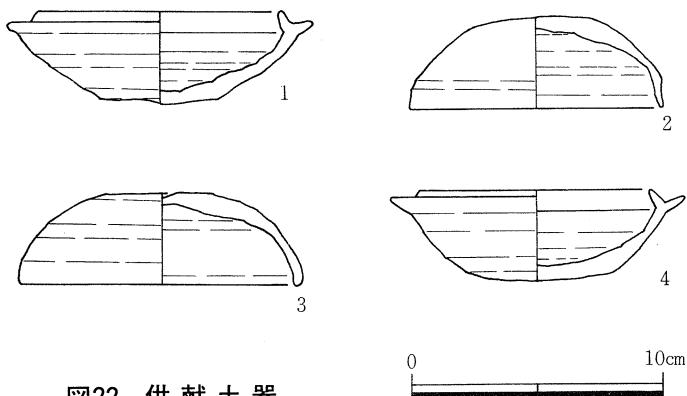


図22. 供 献 土 器

5. 羨門部付近について

羨門の閉塞は木板であったのか何らの残存物も認められなかった。しかし床面の堆積土質は羨道部と前庭部とでは異なっていた。前庭部は地山土で崩潰した粗砂粒を多く含む真砂土の自然堆積であり、羨道部の細粒質のものとは閉塞部位で明らかに区分されていた。

6. 被葬者について

人骨の保存状態は著しく不良であり、発掘者に部位の判断できるものは極めて少ない。上記のように頭蓋骨片は右奥壁寄りに3片、長管骨片は室中央部に右左2か所あり、その間の中央やや奥寄りには歯牙の釘植した顆片や、遊離した歯牙が散布していた。また羨道部床面の堆積土層から追葬が推察され、複数葬が思われた。

人骨片の取り上げは室内位置によって1~10の番号を付して採取し、鑑定を依頼した結果（付編参照）壮年中期の男女2体であるとされ、遺存状態から男（1号人）→女（2号人）の埋葬順が指摘された。

7. 時代観など

この横穴墓は当地方としてはやや小型で、当地に通有の妻入り三角テント型であるが、相対的に天井が高く尖る様式で後出するものであり、また通例に反して真北に開口するものである。

被葬者は男女2人で家族（夫婦）かと指摘されたが、その副葬品はわずかに蓋壺2組のみで、しかも玄室内ではなく羨道部に置かれていた。

これらの状況は社会的階級によるもののみではなく、土器の時代観（IV期古段階）とともに古墳時代の終焉間近を思わせる。

なお、隣接の地形を改めて見直すと、須坂4号墳を後背墳丘とみたてて造営した横穴墓とも思われ、また横穴墓入口推定地の地形に類似する微地形もあることから、未発見の横穴墓の存在が思われるところである。

C. むすび

以上のように4号墳の発掘及び横穴墓状況を総括すると、概ね次のようである。

- 1) 2号墳は丘陵上最も優位の占地で、頂面は特別に広く歪な円形で、外見から弥生墓的なものとみられる。また裾部にあたる小テラス部検出の器台片（図17-1）平底底部（図16-27）はいずれも弥生末の的場式併行とみられることも矛盾しない。
- 2) 2号墳裾及び4号墳盛土下に埋没していた建物跡I・IIに伴う時期の判断できる土器はないが、それを切断又は埋没して築いた4号墳の盛土中には多数の土器片が含まれており、土器様式では弥生末の的場式から最も新しいもので古墳時代前期小谷式併行（甕図15-17・18、低脚壺図18-6）までが認められた。

この中には手捏土器や低脚壺、底部穿孔した器もあり、祭祀の場であったのか或は上方の古墳に由来するのかは不明である。そしてこれには建物跡I・IIに関与するものも含まれていることから、付近に未知のものも含めて同期の住居又は建物が複数存在したと推察される。

- 3) 建物廃絶後まもなく、2号墳からややまとまった砂土の流下堆積が認められることから、2号墳上又は斜面の一部において掘削整形などが行われた可能性がある。
- 4) この後周溝を掘り、付近からと思われる土を運んで4号墳丘を盛土で築く。頂部平坦面は現況で約3m、裾で7mの小円墳で、前方に張り出し様の小台地を造るものである。盛土墳丘上には埋葬の痕跡はついに見出せなかったが、後方及前方斜面の2か所において焚火が行われていた。
- 5) その後工事中、4号墳の前下方斜面に横穴墓が1穴発見された。遺骨の残存は不良であったが男女2体と鑑定され、副葬品は蓋壺2組のみであった。土器はIV期（飛鳥I併行）に属し、7世紀に入るころのものである。

6) この横穴墓の主軸方向は4号墳頂とは若干ずれているが、この墳丘を意識したものと思われ、また付近丘腹にも未知の横穴墓の存在が予想されることから、或は4号墳とした主体不明の墳丘は、これら横穴墓群の後背マウンドとして築造された可能性も否定できない。

以上のように須坂遺跡は弥生末期以降、古墳時代に至るまでの墳墓や建物跡など、各種各時期の遺構が重複して存在していた。

註 後背マウンドを有する横穴墓が近年各地で確認されつつある。近い事例を挙げると、横田町小池(古墳) 横穴1-1~3号穴や佐田町尾崎横穴群などがある。いずれも古墳時代後~末期に比定されている。

VI. 結 語

この度の中国第二中幹線ルート（仁多町）の鉄塔建設計画にかかわって実施された遺跡調査の意義についてまとめてみる。

1. 当初5ヶ所の鉄塔建設計画地点において遺跡が工事範囲にかかっていたが、内3ヶ所の古墳群については関係者協議の結果中国電力側の理解によって建設場所が変更され、内2ヶ所については完全保存が図られたことは喜ばしいことである。しかし1ヶ所については中心部分からはずれたものの周辺においてかかり一部記録保存になったことは残念である。
2. この度の鉄塔建設にかかる調査で町内で3ヶ所の古墳群が新たに発見されたことの意味は大きい。このことは町内にはまだ未発見の遺跡がかなりあり、今後綿密な遺跡分布調査を行えばかなりの数の遺跡が発見される可能性があることを示唆する。
3. 新発見の古墳群の中で、須坂古墳群は特に注目される遺跡である。前方後方墳や径30mの大形円墳などを含む15基からなる古墳群であるが、鉄塔建設工事に關係して発掘調査を実施した4号墳では墳丘基底の地山から住居跡が検出され、封土中から弥生式土器が出土するなどこれまで当地方の古墳では確認されていなかった新しい事実が明らかになった。前方後方（円）墳は、奥出雲地方ではきわめて少なくこれまで4基確認されているだけであり、径30mの円墳は他に奥出雲地方ではなく、県内でも15位以内にはいる大きさである。またこの古墳群が前期から世代を重ねて築かれたものであればこれは当地方の古代史解明の上で新鮮な資料が提供されることになる。関係者の努力により破損が小範囲で押さえられたのは幸いであった。今後周辺遺跡との関連と群全体の詳細な究明を進めることにより当地方の古代史研究がさらに進展することを期待したい。
4. 下沢田遺跡や下沢田北山遺跡など鉄穴関係の遺跡は当地方においてはかなり普遍的に存在するものであり、珍しくないということで軽視されてきたことは否定できない。ところが地形そのものであるこれらの鉄穴関係の遺跡は崖崩れなどで自然に消滅していくが、山地の開発がすすむと森林が伐採されて地表が流失し、その消滅は加速される。このような実態からこの度これらの遺跡の記録をとったことは非常に重要である。なお鉄穴水路トンネル跡について発掘調査をした例は少ない。
5. 須坂古墳群において4号墳下方斜面で横穴墓が検出され、4号墳がこれらの横穴（群）の上方部に設置されたマウンドである可能性が提起された。奥出雲における横穴の上部マウンドの遺跡は未だ少なく、これが事実とすればさらに1例を加えることになる。

付編 I

須坂遺跡の焼土面の残留磁気測定結果

島根大学総合理工学部 時枝克安 成 亨美 渡部道賀

須坂4号墳にある2つの焼土面から定方位試料を採取して残留磁気を測定した。試料の残留磁気は弱くその方向は大きく分散した。方向の分散は交流消磁によっても改善されなかつたので、焼土の最終焼成年代を推定できなかつた。

1. 遺構と試料

(1) II号建物跡焼土面

II号建物跡床面の中央付近に縁が四辺形の浅い窪み（中心部に深く小さい円錐形窪みをもつ）があり、縁の外側が焼けている。縁の南西側の焼土面から24個の定方位試料を採取した。

(2) 焚火跡Na 2 焼土面

2号古墳の隣接地に古墳斜面からの流入土が堆積しており、そこに穿たれた円錐形窪みの底部に風化花崗岩が露出し焼けている。この焼けた風化花崗岩から13個の試料を採取した。この焼土面は住居廃絶後の堆積土上での焚火跡と推定されている。

2. 自然残留磁気測定結果と交流消磁

図1、2は自然残留磁気の方向の測定結果であるが、過去2000年間の地磁気変動範囲内($35^\circ < \text{伏角} < 60^\circ$, $-15^\circ < \text{偏角} < 15^\circ$)で方向が揃っているデータは認められない。自然残留磁気強度が概ね 10^{-6} (emu/g)とかなり弱いことから、焼土の焼成度が低いことが方向の揃わない理由の一つにあげられるだろう。もし、方向分散の主因が粘性残留磁気のような弱い抗磁力をもつ2次の磁化の付加である場合には、これを交流消磁によって取り除き、残留磁気の方向のまとまりを改善できる。それゆえ、II号建物跡焼土と焚火跡Na 2 焼土面から各々5ヶの試料を選び10mTの交流消磁を行った。しかし、消磁の結果、試料の磁化強度が約半減するにもかかわらず、磁化方向が揃う傾向は全く認められなかつた。したがつて、残留磁気の方向がまとまらないのは粘性残留磁気のせいではなく、低焼成度と後世の攪乱のためと考えられる。

3. 結論

II号建物跡焼土と焚火跡No.2の焼土面の自然残留磁気の方向が揃わず、交流消磁をしても残留磁気の方向が揃う傾向が認められないので、残念ながら地磁気年代を求めることができない。

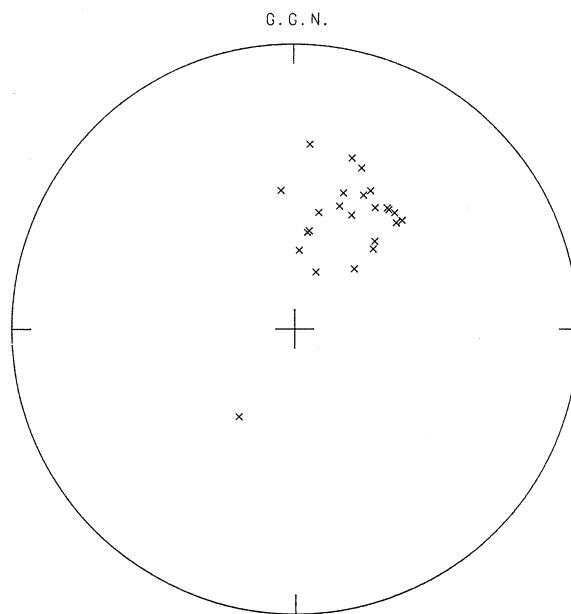


図1. 須坂遺跡 II号建物跡焼土面の
自然残留磁気の方向

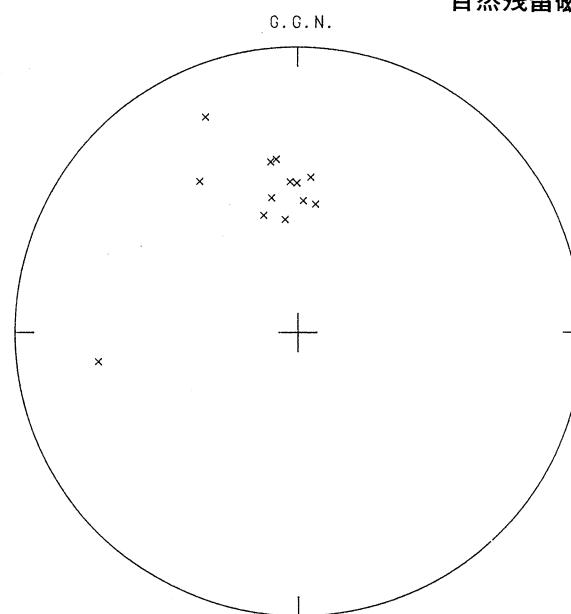


図2. 須坂遺跡の焚火跡No. 2 焼土面の
自然残留磁気の方向

付編Ⅱ

須坂遺跡第1号横穴墓出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝

I はじめに

島根県仁多町下三所地内字須坂の須坂遺跡第1号横穴墓の玄室内には、遺存性不良の人骨が10ヶ所（採取番号1～10）に散在していた。

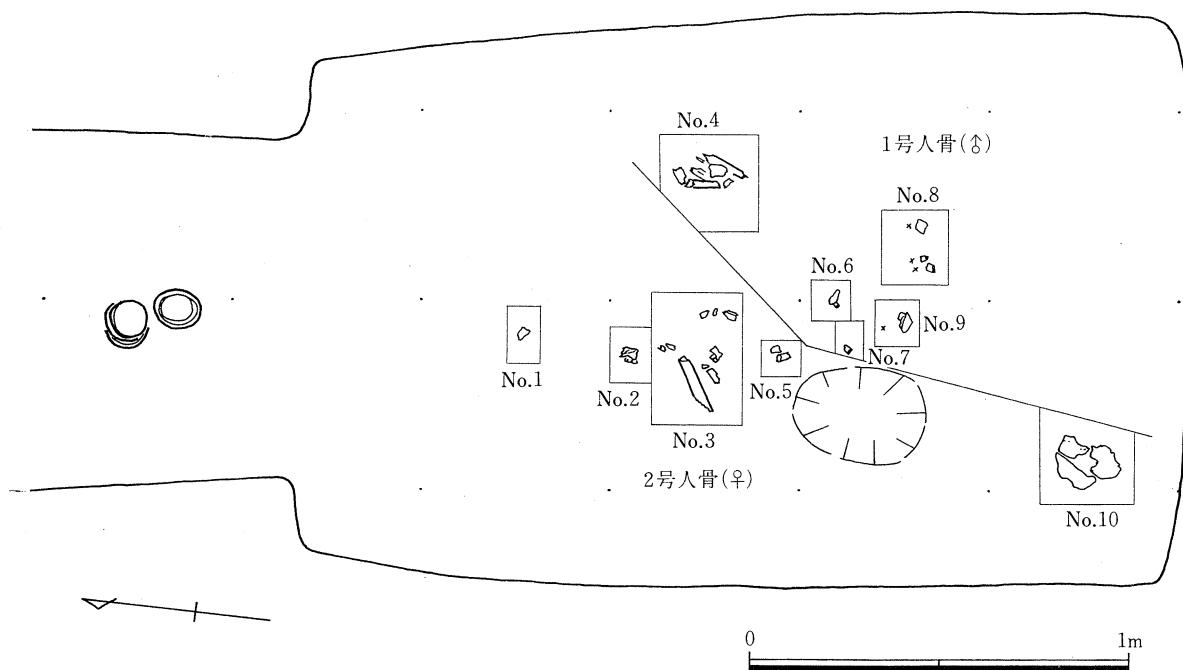


図1. 須坂遺跡第1号横穴墓出土人骨

精査すると、本横穴墓には被葬者男・女2体が埋葬されていた。

玄室中央部と玄室左側中央部に散在していた人骨は、男性骨（1号人骨と仮称）であった。玄室右奥から玄室中央部にかけて散在していた人骨は、女性骨（2号人骨と仮称）であった。

これらの2体の人骨につき、

- | | |
|--------------|---------|
| 1. 骨の遺存性 | 4. 年齢推定 |
| 2. 遺残骨名とその部位 | 5. 身長推定 |
| 3. 性別推定 | 6. その他 |

について記述する。

II 1号人骨

1. 骨の遺存性

本屍骨の遺残性はきわめて不良で、玄室中央部（採取番号No. 6・7・8・9）と、玄室左側中央部（No. 4）の2ヶ所に散在していた（図1）。

完形の骨は全くなく、破損した脆弱化した骨片のみであった。しかし、左右の上顎骨歯槽部の一部が遺残、釘植歯牙もみられた。

2. 遺残骨名とその部位

1) 頭蓋骨

側頭骨部：右錐体（内耳孔部）

上顎骨：左右の歯槽部の一部と釘植歯

		歯牙							
釘植歯牙	2ヶ	○	×	△	△	○	×	×	○
遊離歯牙	5ヶ	8	7	6	5	2	4	5	6
<hr/>									
○：釘植歯牙 △：遊離歯牙 ×：欠（歯槽開放） ॥：破損部位									

2) 上肢骨

上腕骨：右上腕骨骨体上部

3) 下肢骨

大腿骨：右大腿骨骨体下部

4) その他

骨名不明骨片：上、下肢骨の一部

3. 性別推定

遺残骨に完形骨はない。

本屍（1号人骨）の遺残歯牙は、2号人骨（♀）の歯牙と比較して歯冠径が大きい。

本屍の上腕骨と大腿骨の骨体部が、2号人骨のと比較して比較的大きく、筋付着部の粗面の発達がよいことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 年齢推定

本屍の遺残骨に完形骨がなく、年齢推定可能な部位はない。そこで遺残歯牙から年齢推定することにする。

8|（右上顎第3大臼歯）が萌出している。本歯は、一般的に17、18～25歳位までに萌出すると言われている。

遺残歯牙の咬耗度をみると、全歯とも咬耗は軽度でエナメル質にとどまり、ブロカーノー¹であることから、年齢は20代後半（壮年中期）位が推定される。

5. 身長推定

本屍骨は完形の四肢骨がないので、身長は不詳である。

6. その他

本屍骨は破損化した骨のみで、特異的疾患および骨折などは不詳である。

III 2号人骨

1. 骨の遺存性

本屍骨は、玄室右側奥（No.10）から玄室中央部（No.5・3・2・1）にかけて散在していた（図参照）。

骨の遺残性は不良であるが、1号人骨（♀）よりは少し遺残性がよく、遺残骨量も少し多い。

2. 遺残骨名とその部位

1) 頭蓋骨

頭骨：左頭頂部～側頭鱗縁部

右頭頂部の一部、後頭骨

左上顎骨歯槽部の一部と釘植

歯牙 3ヶ

下顎骨：右下顎骨歯槽部の一部と釘植

歯牙 3ヶ

遊離歯牙：3ヶ

○：釘植歯牙 ○：埋伏歯牙 △：遊離歯牙 ×：欠歯槽開放

△：破損部位



2) 胸郭骨

胸骨：左胸骨柄の一部

3) 上肢骨

鎖骨：左鎖骨（胸骨端部）の一部

4) 下肢骨

大腿骨：左大腿骨骨体中央部（約15cm骨片化）

足骨：左右不明の踵骨の骨片

3. 性別推定

本屍骨に完形骨はない。

本屍の遺残歯牙の歯冠径の大きさは、1号人骨（♀）のと比較してすべて小さい。

頭骨の後頭骨の後頭平面は、きわめて平坦で筋付着部の発達が弱いことから、本屍骨は

女性骨と推定する。

4. 年齢推定

遺残頭蓋骨の冠状縫合部と人字縫合部は、鋸状に鋭利である。

本屍の歯牙のI8（左上顎第3大臼歯）は埋伏歯であった。本歯牙の萌出は、一般的には17、18～25歳位までにみられるが、一部は埋伏歯のままであることもある。それ故、埋伏歯で萌出していないから成人に達していないとは言えない。

遺残歯牙の咬耗度は、1号人骨よりも少し進行しているがエナメル質にとどまり、平坦化していた。

本屍の推定年齢はおそらく20代後半（壮年中期）位であろう。

5. 身長推定

本屍骨は完形の四肢骨が遺残していないので、身長は不詳である。

6. その他

本屍骨は破損化した骨のみで、特異的疾患と骨折などは不詳である。

M 考 察

1. 埋葬順序

1号人骨（♂）の遺残性はきわめて不良であった。遺残骨は頭骨の一部（右錐体部）、左右の上顎骨歯槽部の一部、上腕骨と大腿骨の一部のみである。2号人骨に比して骨の遺残性は悪く、遺残骨量ともに少ない。

2号人骨（♀）の遺残性は不良であるが、遺残骨量は1号人骨（♂）より少し多い。遺残骨は頭骨（左頭頂部・右頭頂部・後頭部・左上顎歯槽部）、鎖骨と胸骨の一部、大腿骨と足骨の一部である。

2号人骨（♀）では、比較的遺残性の悪いとされている胸骨片が遺残していた。

本横穴の被葬者は男女2体で、ともに成人骨である。

追葬者が埋葬されてから発掘されるまでは、同じ年数と条件を経過してきたので、それ以前の埋葬年数が骨の遺残性に影響する。

以上のことから、骨の遺残性が悪く遺残骨量の少ない1号人骨（♂）が先に埋葬され、次に2号人骨（♀）が追葬されたと思量する。

2. 被葬者同志の関係

横穴墓は家族墓的性格が強いとされており、一族や同族の者が埋葬されていることが多い。¹⁾

本横穴墓の被葬者は成人男女2体である。

同じ仁多町内で横穴墓に成人男女2体が埋葬された事例として、平成8年4月発掘された高田地内の玄蔵坊横穴墓がある。⁵⁾

被葬者のうち女性は遺残性が悪く、年齢は一応成人域、身長不詳であった。

男性は遺残性が良く、年齢は熟年（40代）、身長は157～159cmであった。特異的所見として、左脛骨頸部骨折があり自然治癒が認められた。

埋葬順序は遺残骨の保存状態の良否と遺残骨量からみて、初葬は女性、追葬は男性と推定された。

これらの横穴墓は年代的にもほぼ同年代であり、被葬者同志の間柄はともに夫婦関係が思量された。

V まとめ

仁多町下三所地内字須坂の須坂第1号横穴墓の玄室内には、遺残性のきわめて不良の人骨が散在していた。

被葬者は成人男女2体であった。

1号人骨は男性、年齢は壮年中期（20代後半）位、身長は不詳である。

2号人骨は女性、年齢は壮年中期（20代後半）位、身長は不詳である。

骨の遺残性と遺残骨量からみて、埋葬順序は初葬は男性、追葬は女性と推定された。

被葬者同志の間柄は、夫婦関係が思量された。

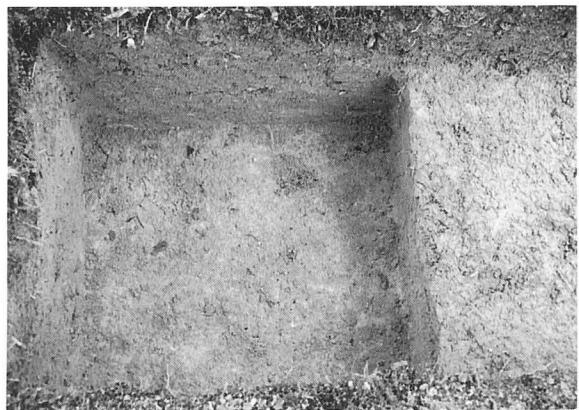
文献

- 1) 池上 悟(1980)：横穴墓 東京 ニュー・サイエンス社
- 2) 井上晃孝(1984)：高広遺跡横穴墓より出土の人骨について 高広遺跡発掘調査報告書 195－200 島根県教育委員会
- 3) 井上晃孝(1984)：東下谷横穴群出土人骨について 東下谷横穴群発掘調査報告書 30－44 島根県 三刀屋町教育委員会
- 4) 池田次郎(1993)：島根県広瀬町本郷上口横穴出土の古墳時代人骨について 島根考古学会誌 10 181－207
- 5) 井上晃孝(1996)：玄蔵坊横穴出土人骨 仁多町玄蔵坊横穴発掘調査概報 島根県仁多町教育委員会





鉄塔番号 283(三沢字家の上他) 現地



調査溝



鉄塔番号 299(郡村字水谷他) 現地



調査溝



鉄塔番号 301(郡村字勇言谷他) 現地



調査溝

PL 2 下沢田遺跡



鉄穴水路跡(東側)



鉄穴水路跡(西側)



鉄穴水路跡断面土層(AB)



鉄穴水路跡(西側)



鉄穴切羽跡(中央)



鉄穴切羽跡(中央)



鉄穴切羽跡(西側)



鉄穴切羽跡(西側)



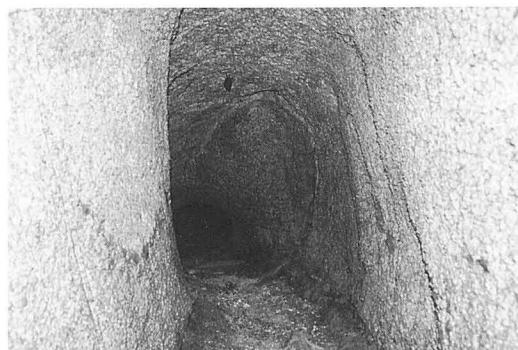
鉄穴水路トンネル跡南口



鉄穴水路トンネル跡南口の底部



南斜面鉄穴水路跡(西側)



鉄穴水路トンネル跡内部



南斜面鉄穴水路跡(東側)



鉄穴水路トンネル跡北口



鉄穴水路跡断面土層(IJ)

PL 4 家ノ上古墳群



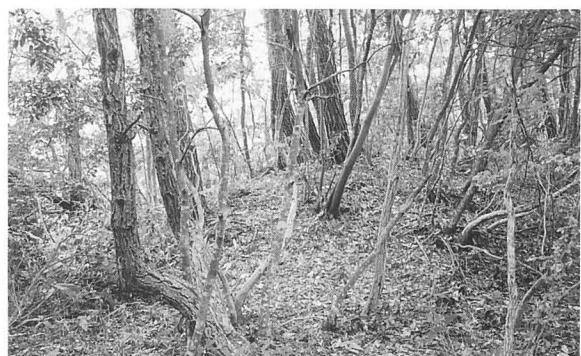
1号墳(西から)



1号墳(南から)



1号墳墳頂



2号墳(北から)



3号墳(東から)



4号墳(北から)



5号墳(東から)



6号墳(東から)



1号墳(北より)



1号墳(南東より)



2号墳(北より)



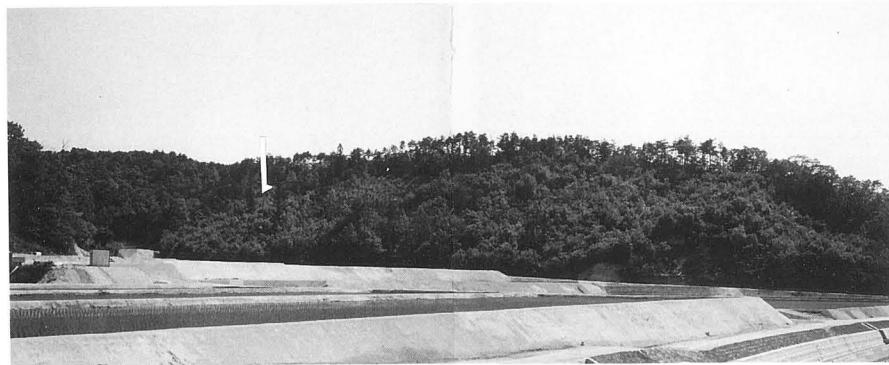
1号墳(右向かい)と2号墳(左手前)



3号墳(東から)



4号墳(南から)



麓から4号墳を望む



発掘前全景



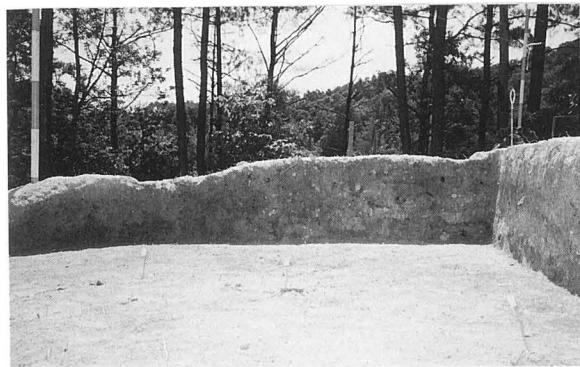
トレンチ調査



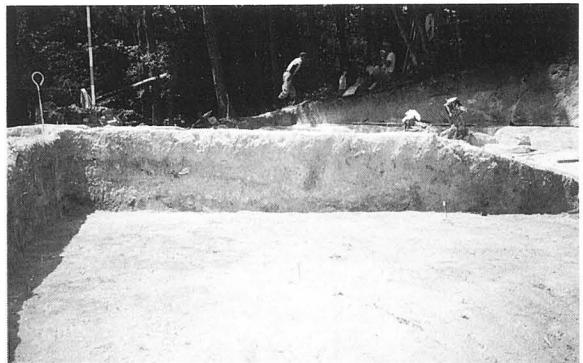
表土陥去



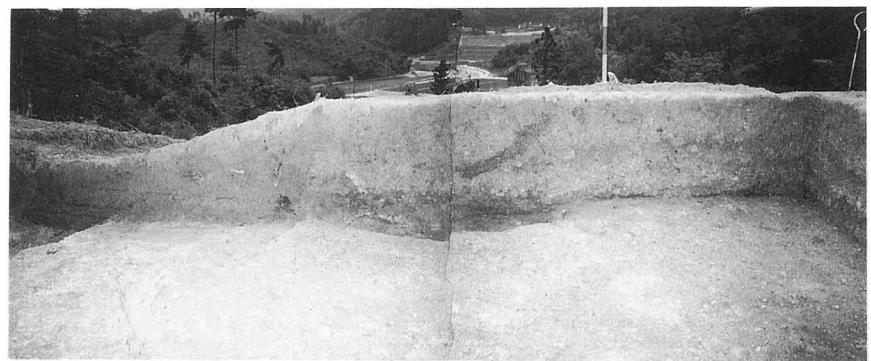
4号墳の全景



墳丘の土層 A'断面(北・前方)



C断面(南・後方)



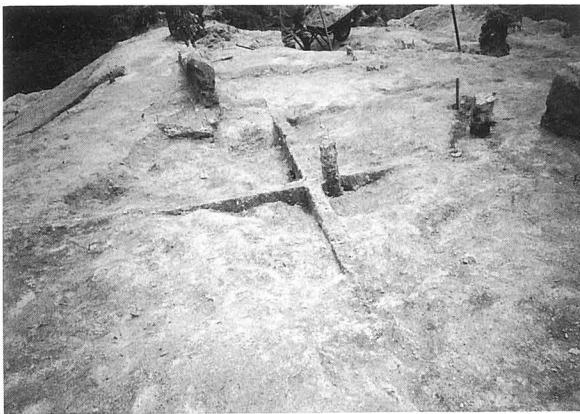
B断面(西方)



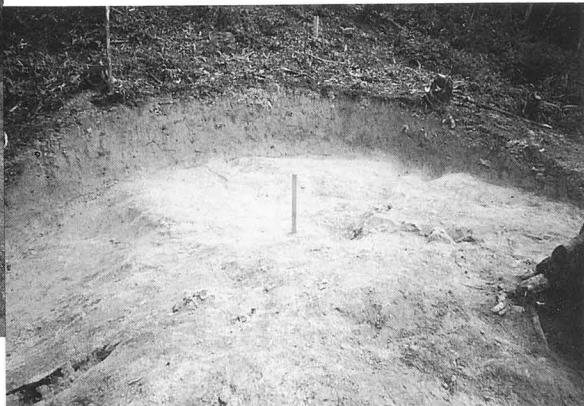
A断面(周溝部)



前方部掘り下げ



中心部掘り下げ(地山面)



2号墳裾削平段



周溝で切斷された建物跡I



2号墳裾削平段と建物跡I



建物跡 I



墳丘下に埋没していた建物跡II



熱殘磁氣年代測定作業



現地指導



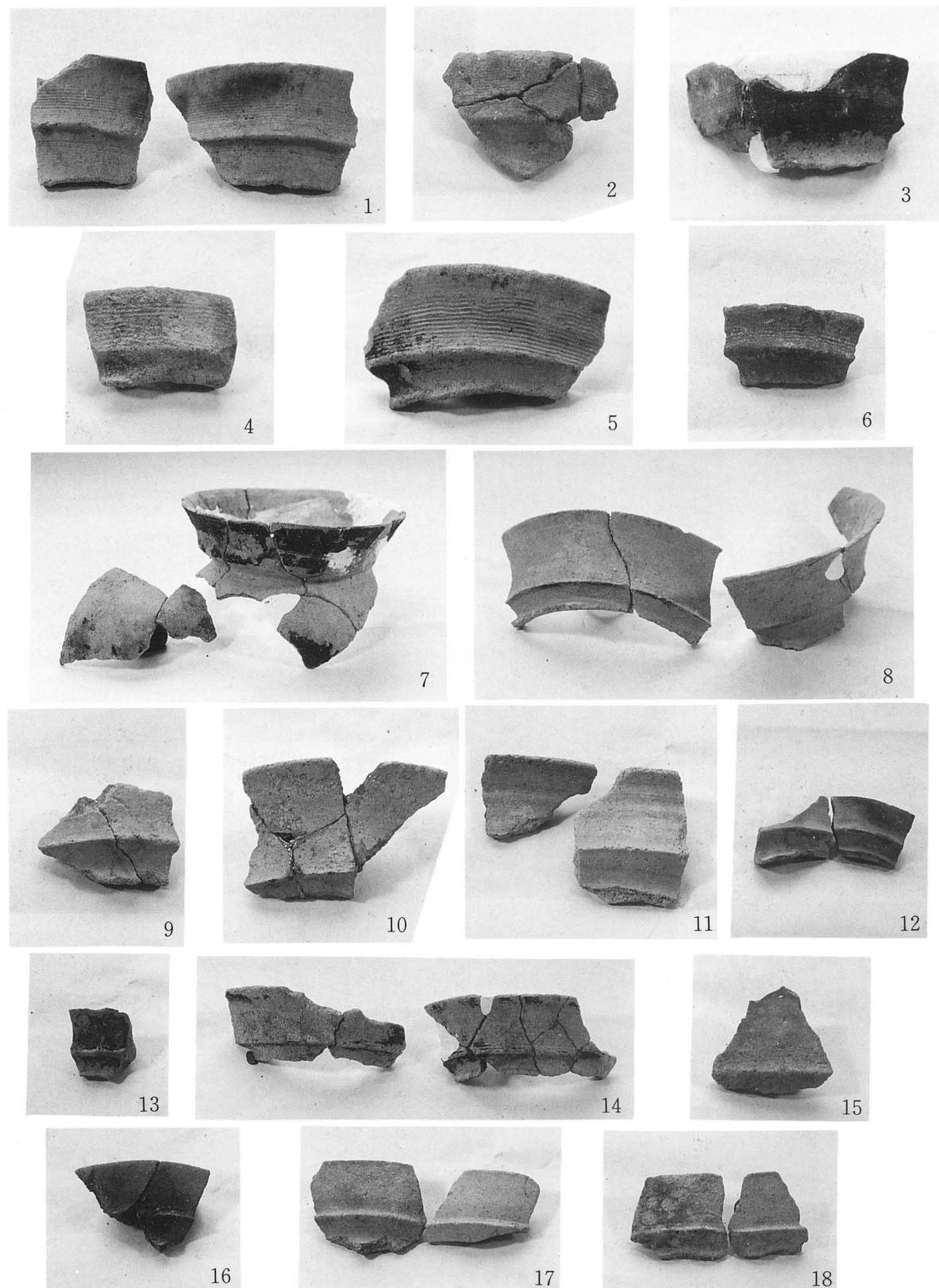
現地説明会



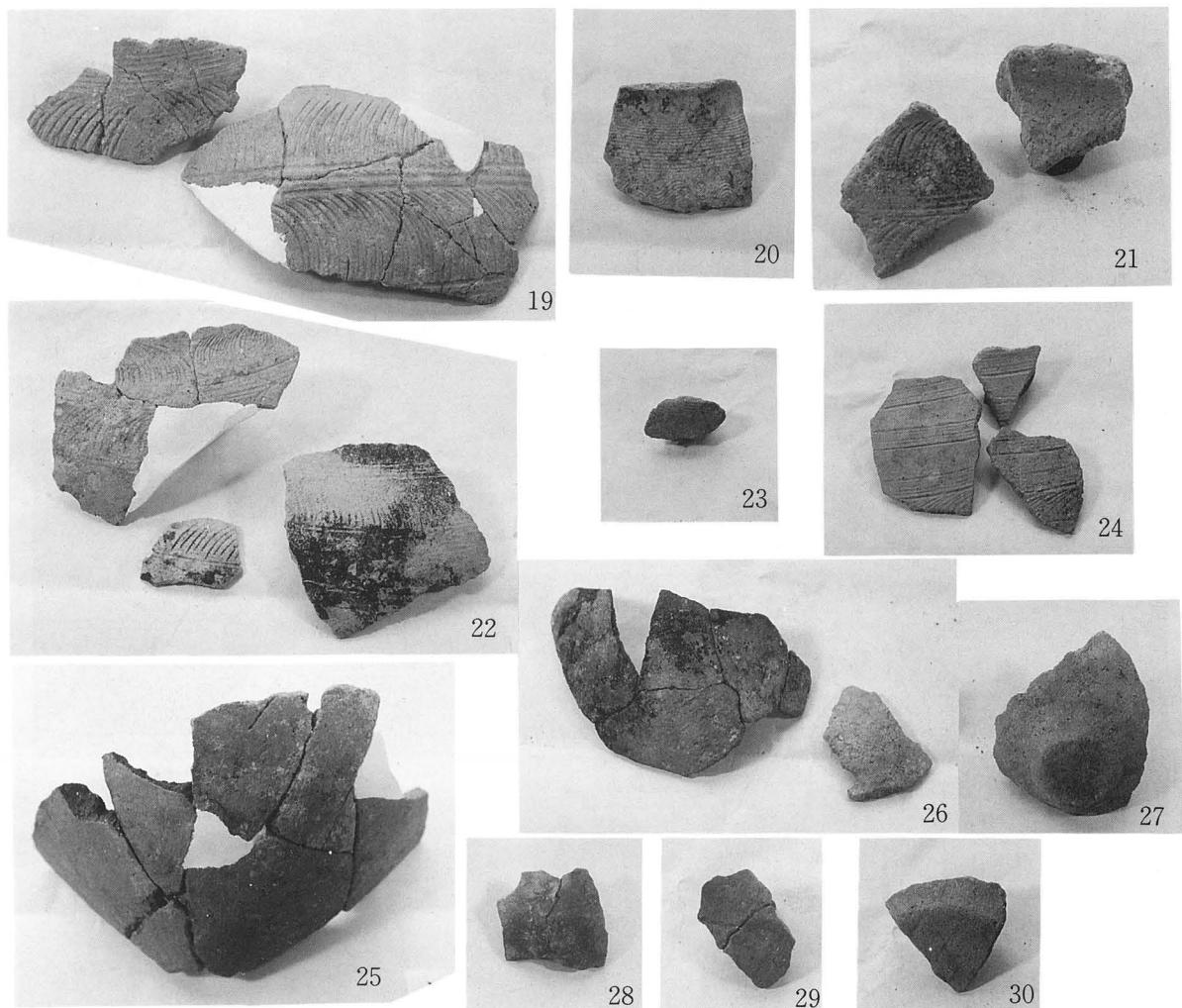
現地説明会



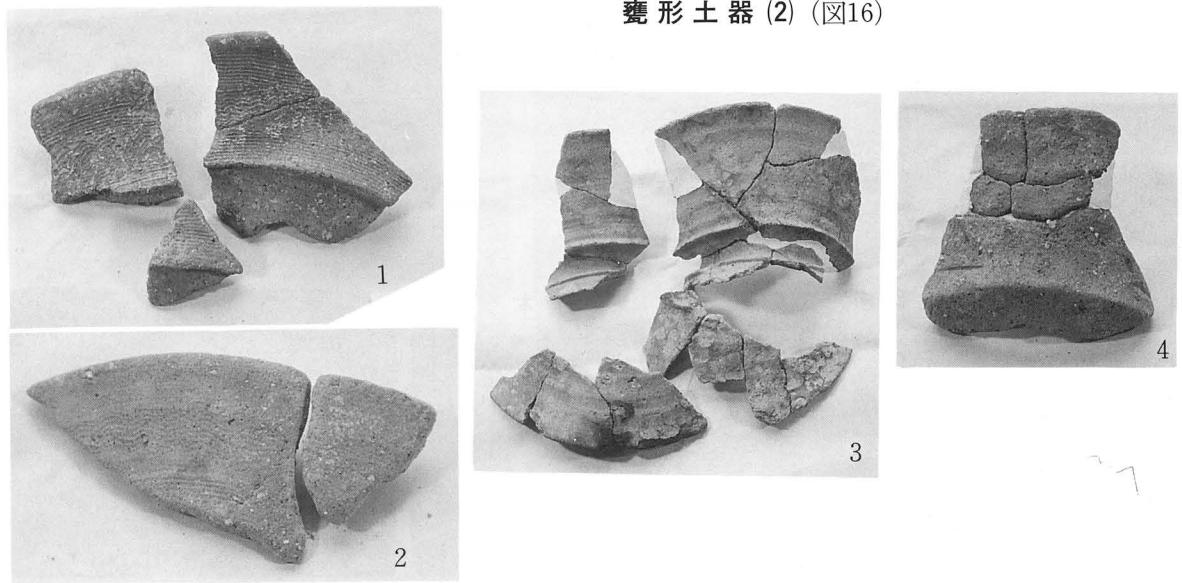
現地説明会



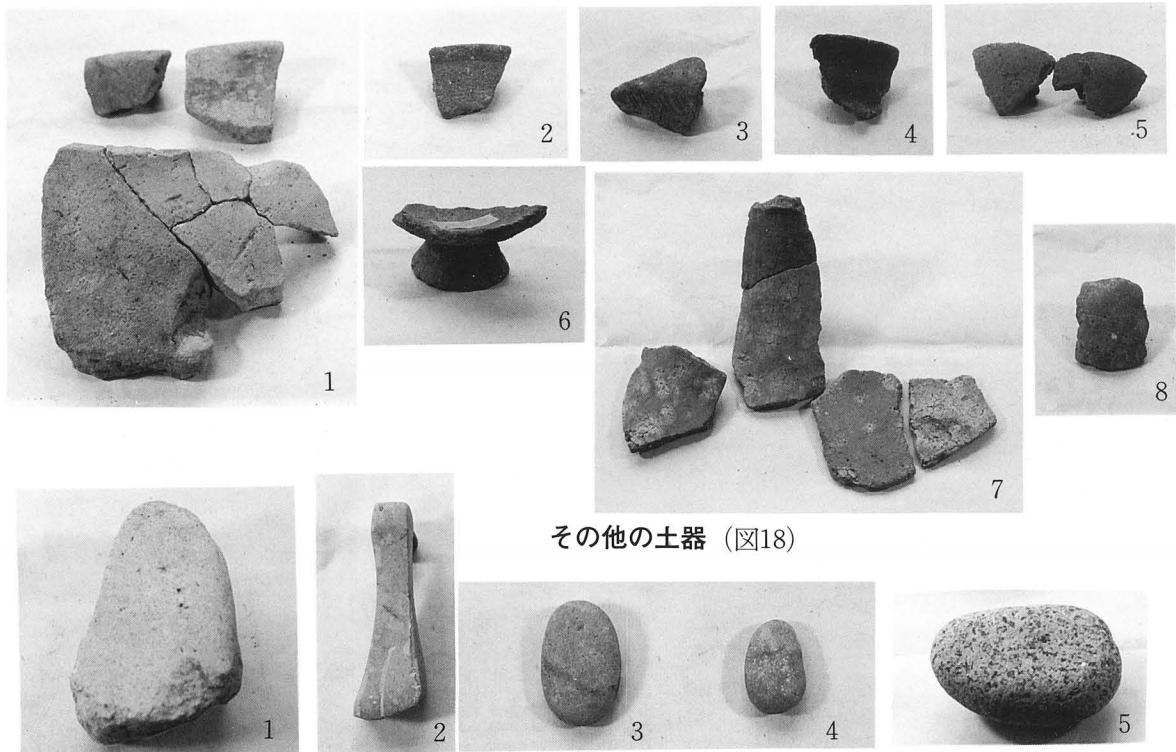
龜形土器 (1) (図15)



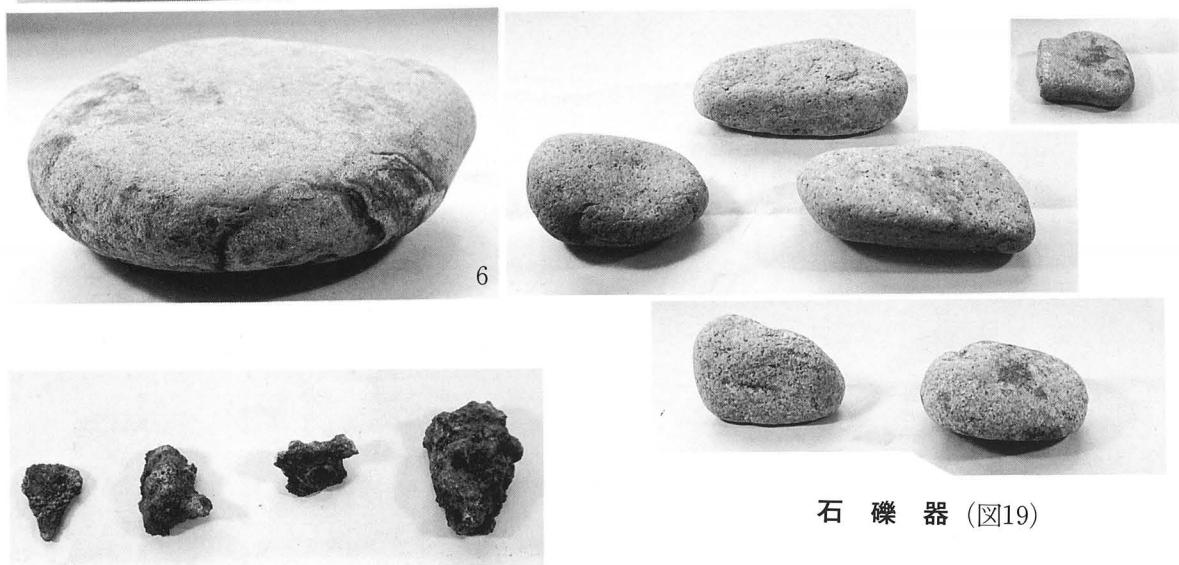
甕形土器(2)(図16)



器台(図17)



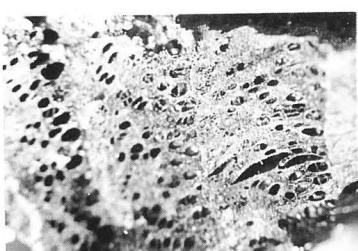
その他の土器 (図18)



石 碓 器 (図19)

鉄 鑄 塊

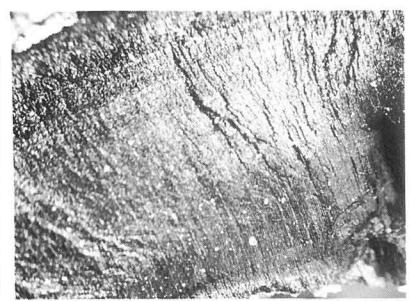
出土木炭



焚火跡1 (クリ)



焚火跡2 (クヌギ)



建物跡Ⅱ中央ピット (サカキ)



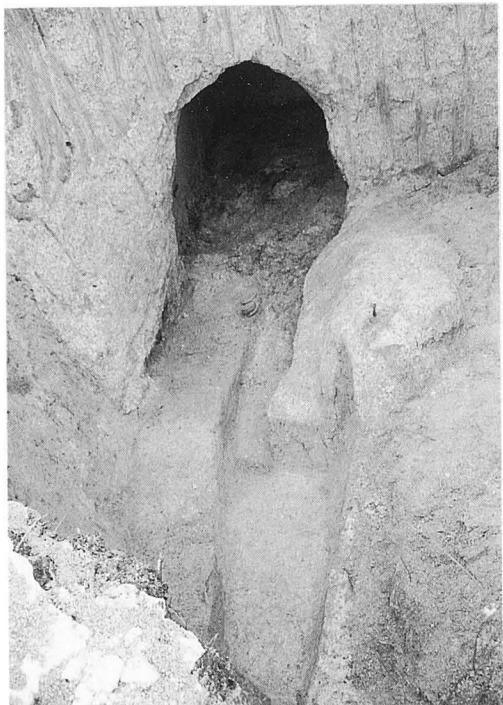
発見時状況(玄室内)



遠景



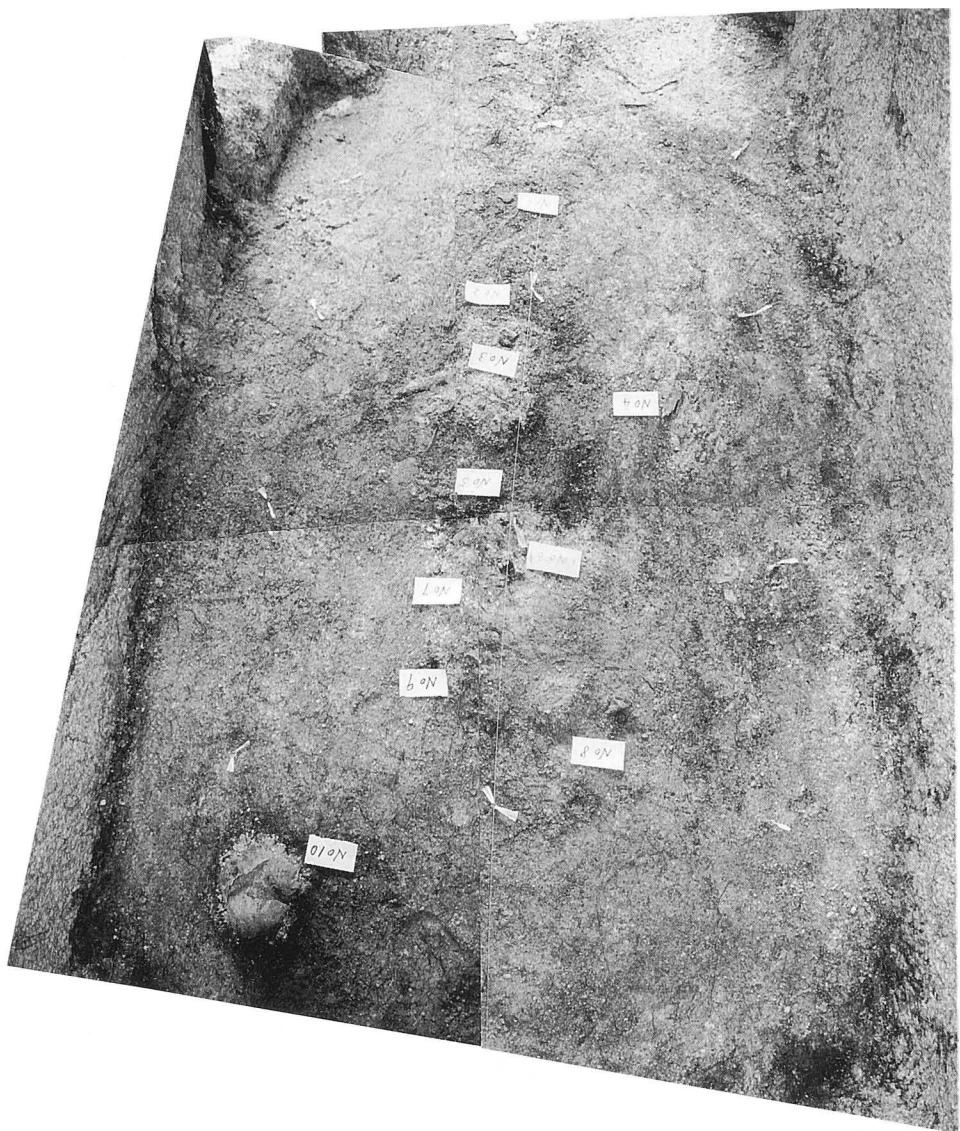
発見時状況



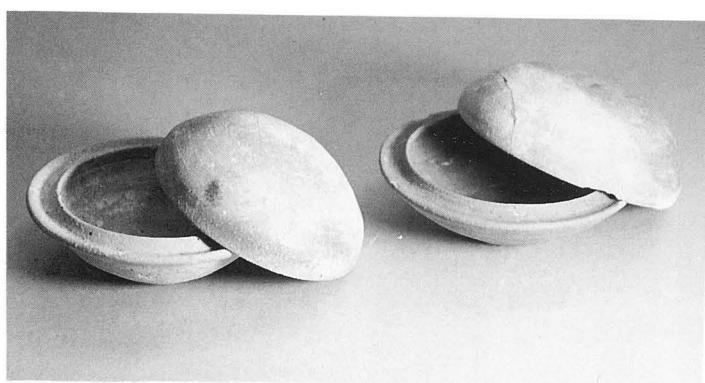
前庭部



供献土器



玄室内の状況



須恵器

中国第二中幹線ルート送電鉄塔
建設予定地内遺跡調査報告書

須坂遺跡・他

1997年3月

発行 仁多町教育委員会
島根県仁多郡仁多町大字三成358-1

印刷 (有)木次印刷
島根県飯石郡三刀屋町1635